



福知山公立大学 学長

井口 和起

“市民の大学”“地域のための大学”“世界とともに歩む大学”を基本理念に掲げて2016年4月に開学した本学は、以来6年間、この基本理念に基づいて「地域協働型教育」に取り組んできました。1年生から4年生まで、学生がそれぞれに選択したテーマにしたがって担当の教員とともに地域を訪問し、住民の方々と交流・協働して地域の課題を発見し、解決の方策を検討するという教育活動です。

本報告書は、2021年度のこの教育活動の概要をゼミの活動を中心に、本年度の学内での「成果報告会」の様子も含め、学生たちが自主的に取り組んだ「学生プロジェクト」や他大学学生たちとの交流の概要などもまとめたものです。一昨年度から始めた「卒業研究」のテーマ一覧も掲載しております。

開学以来6冊目の報告書になりますが、昨年度からは地域経営学部「地域協働型教育」の「成果報告書」という表題にしています。というのも、昨年度からは情報学部を開設して本学も2学部を有する大学に成長したからです。情報学部も「地域協働型教育」を重要な教育課題としていますが、その成果の報告はこれとは異なったかたちで地域の方々に報告することになっています。

また、開学以来4冊目までの報告書の表題には「地域協働型実践教育」と「実践」という言葉を入れておりましたが、昨年度からこの用語を省きました。その理由をここで詳しく説明することはいたしません、ここにはこの授業のあり方をめぐる学部教員の中での種々の議論と検討があったことだけは付記しておきます。それは本学の教育の特徴全体の深化をめざす教育研究活動の営みの反映でもあったと思っています。

さらに、昨年度に引き続きご存知のとりの「コロナ禍」の中で、地域に出向くことにはかなり困難がありましたが、このように報告書が刊行でき、1年生の学生たちの「学生の気づき」欄の記述も充実してきたことを嬉しく思います。

なお、本年度末で学長職の任期を終え、この欄に私が一文をよせるのは最後になります。関係の教職員の皆様やなによりも学生の皆さんに深く感謝いたしますとともに、末尾になりましたが、この授業の受け入れ先となってお力添えくださいました地域の方々に篤くお礼申し上げます。今後とも引き続き、地域の方々をはじめご関心をお寄せくださる方々からの厳しいご批判と暖かい励まし

が頂戴できれば嬉しい限りです。

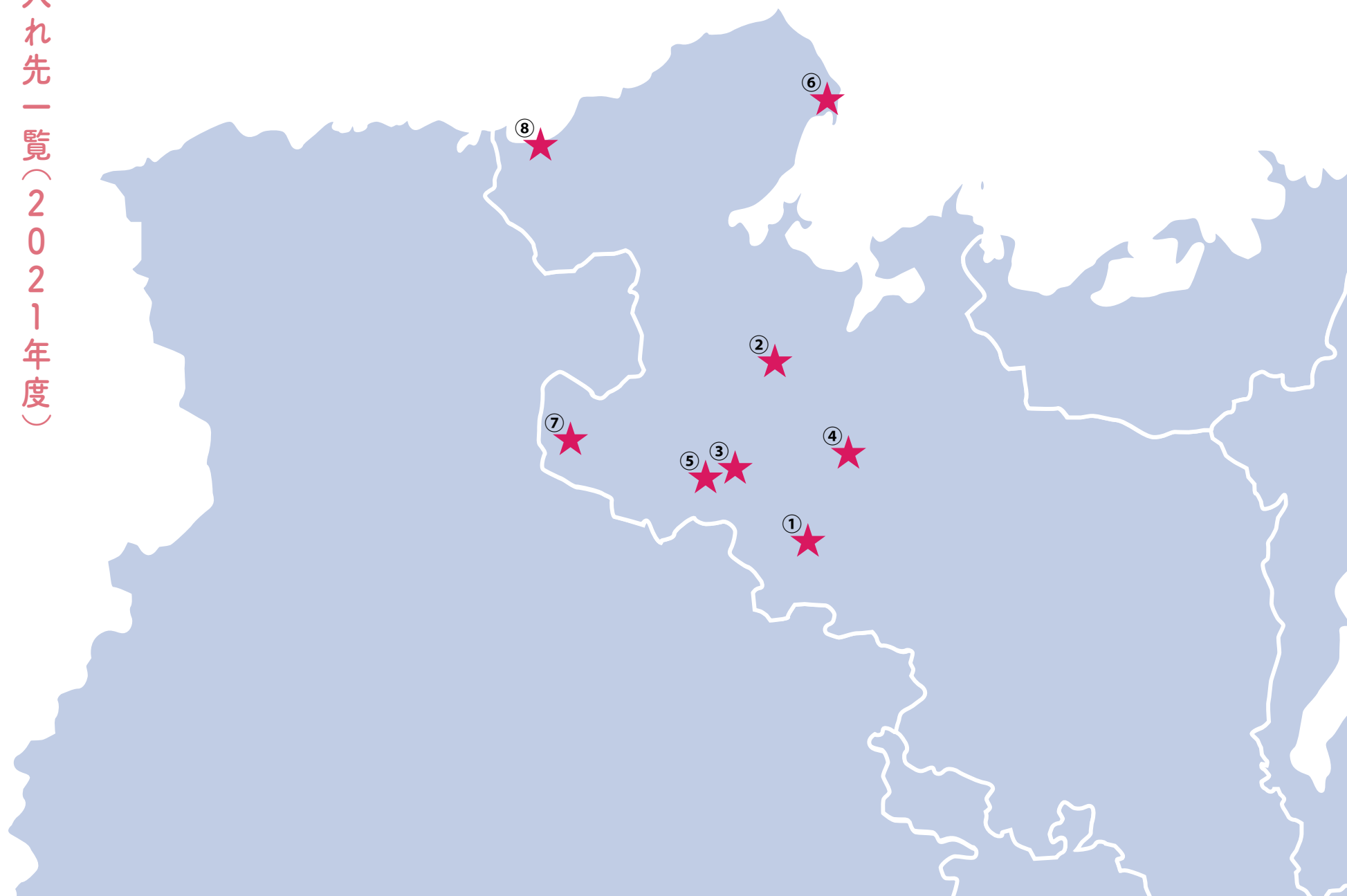
目次

はじめに	01
第1部 福知山公立大学における地域協働型教育 受入れ先一覧	03
第2部 各ゼミの取り組み報告	
1 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ(1年生)	05
2 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ(2年生) 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(3年生)	11
3 卒業研究Ⅰ・Ⅱ(4年生)	33
第3部 地域協働型教育成果報告会	39
第4部 学生プロジェクト	41

地域協働型教育 受入れ先一覧（2021年度）

頁	取り組み名	地図番号 自治体名
05	福知山市三和町の地域課題	★① 福知山市三和町
06	福知山市・夜久野地域での学び	福知山市夜久野町
07	福知山市・大江地域での学び	★② 福知山市大江町
08	地域との協働実践を通してプロジェクトマネジメントを学ぶ	福知山市内
09	廃校活用・空き店舗活用・パーキングエリア活用から考える地域課題プロジェクト	★③ 福知山市内
10	北近畿の医療福祉における地域協働の基礎知識習得とその実際	福知山市内、宮津市
11	福知山市の人口減少を食い止める～子育て世代を応援！子どもを守る家！！～	学内（オンライン）
12	企業活動と社会課題－ドメイン変遷とイノベーションの観点から－	★④ 綾部市ほか
13	人口減少・人口移動を労働者開学の視点から考える	福知山市内
14	福知山から考える世界と多様性－異文化理解の視点から－	学内
15	文理融合型経営学の展開	学内
16	まちをもっと楽しく面白く。コミュニティをデザインしよう。	★⑤ 福知山市内
17	交流観光等による多自然圏（非大都市圏）の地域活性化	和歌山、大江、三和、綾部、神戸、豊岡、島根、朝来、岡山、徳島
18	自治体研究（基礎編・応用編）	学内

頁	取り組み名	地図番号 自治体名
19	地域情報の収集・分析・伝達	福知山市内
20	北近畿の多様性を知り、地域課題の解決に取り組む	福知山、伊根、宮津、与謝野、京丹後、舞鶴、朝来、綾部、丹波
21	キャリアパスを意識した能力開発	学内
22	1人1プロジェクトリーダー制による産学官連携政策ゼミ	宮津市、与謝野、福知山市内
23	「市町村産業連関表」作成に関する方法論の開発－京都府・兵庫県の67市町村の作成を通じて－	京都府・兵庫県
24	観光地域づくりを巡る諸問題を考える	★⑥ 伊根町・京丹後市
25	地域資源を活用する観光地域づくり、課題解決に向けた実践から学ぶ	福知山市・伊根町・美山
26	ビッグ&オープンデータを「さばく」データ板前を養成する	学内
27	うるし製品の製作と販売検討	★⑦ 福知山市夜久野町
28	地域の社会福祉的課題をみつめて解決～中山間地域の少子高齢化問題を中心に～	夜久野・城崎
29	社会と地域の課題－特に医学・医療・福祉に関する課題とアプローチを見出す	学内
30	学生が主体となって実施する調査研究	学内
31	公表されているデータから地域の医療・介護の現状、及び医療機関・介護施設の機能を分析する	沖縄
32	自分で作る自分の健康・運動・栄養・休養・平時の自分の健康状態を知る	★⑧ 京丹後市



福知山市・夜久野地域での学び

担当者名

神谷 達夫
中尾 誠二



活動内容・テーマ

当クラスは2021年度において以下の通り計4回「福知山市・夜久野地域」を訪問し、様々な地域課題について現地に関係者から話を聞かせていただいた。

第1回（7月15日）福知山市夜久野支所・夜久野みらいまちづくり協議会・図書館等の機能が集約された『夜久野ふれあいプラザ』等、第2回（11月18日）農家民宿『米ya』、第3回（12月2日）古

民家活用『宮カフェ』、第4回（12月16日）茶畑再生やムベ栽培等に取り組む『西垣地区』。

他にも、福知山環境会議との合同授業（6月10日および6月17日）や新町商店街ワンダーマーケットの見学（11月28日）、夜久野関連資料のデジタルアーカイブ作業（随時）も行った。

これら年間を通しての演習で得られた学びについて報告する。



学生の気づき

1年間、フィールドワークなどで多くのものを見学し、多くのことを聞き学んできた。地域経営演習の講義を受ける前までは、都市として消滅しないために、お金をかけて移住者を呼び込み、チェーン店やコンビニなどを多く誘致し、便利で過ごしやすい地域を作ればよいと考えていた。しかし、その考えは間違っていたことに気づいた。住民や移住希望者との関係を大切に、住民同士が助け合えるような地域をつくること、地域を活性化させることにより、地域の人々を大切に、寄り添い居場所を作ることなどを目的とした活動をする、地域をより良い方向へと進ませるために住民同士が協力し合い、楽しみながら様々な行動を起こすことなども地域経営の1つの形であり、地域をより良くするためには必要なことであるということ学んだ。現地を訪れ、得た学びや経験はそこでしか得られないものであると考えられ、大変有意義な講義で、貴重な時間を過ごさせて頂いたと感じる。

（地域経営学科1年生 宇苗 隼）

私は1年間、神谷・中尾教授の下、夜久野町に関する地域課題について学んだ。4回のフィールドワークを通して、地域の実情について学習し、その土地の雰囲気などを感じ取った。夜久野支所の方や、地域住民の方たちと交流することで、彼ら一人一人が思う夜久野町の良さや抱える問題などを聞くことができた。昨今では、情報を入手する手段として、インターネットが主流になっているが、その場でしか聞けない地域住民の声や、土地の風土などはネットでは得難い情報だと感じた。これから、地域経営を学んでいくうえで、地域の情報を入手する際には、ネット上の既に載っている情報を信じるだけでなく、実際に現地に飛び込み、自発的に行動することが重要だと感じた。本格的に地域を対象とした活動がこれから始まるので、この授業で学んだ地域経営に対する姿勢を忘れずに活動を行いたいと思う。

（地域経営学科1年生 山田 晴己）



三和農業タウン構築!!! ～Seasonから始まる地域×農業～

私は、三和地域の企業について調べた。中でもSeasonという農業を営む会社に着目した。日本の農業は、担い手不足、食料自給率の低下、耕作放棄地の拡大、農家数の減少等多くの課題が存在している。しかし、Seasonという企業は万願寺とうがらしという京ブランドがついている野菜の生産、ITを用いた経営方法等で成功を収めてきている。そこで私はSeasonという企業がどのように発展してきたのかを調べ、Seasonの強みや課題について考えた。また、三和地域とSeasonの将来像について考え、Seasonという企業が地域にとってどのような存在になることが理想であるかを考えた。最後にそのために必要であることは何かを考え、提案する。



三和地域の交通 ～みわひまわりライドについて～

私たちの班は、三和地域の交通における問題点について発表する。現在、三和地域では過疎化・高齢化によって車に代わる新たな交通手段を必要とする人が多くみられる。しかし、市バスの利用者は少なく、利用者のニーズに合っているとは言えない。そこで、新たな移動手段として個別有償運送が導入された。「みわひまわりライド」とは、営利とは認められない対価で会員を対象に自家用車を利



わっしょい大原 ～祭りで地域を盛り上げる～

三和町大原地域の大原神社と民宿あぶらやを訪問し、地域の特徴と課題を踏まえ、学生ならではの解決策を提案する。まず課題として、大原神社は例祭の担い手や広報手段の不足、あぶらやは一般客の少ない点、知名度が低い点が挙げられた。この課題から、大原神社の例祭を中心に3つの解決策を考えた。1つ目は例祭時Instagramを用いた大原フォトラリーを行い、大原全体の知名度向上を目指す案だ。2つ目は例祭時にあぶらやをお借りし、学生カフェを開くことで若者の関係人口増加を図る案だ。3つ目は仮想空間メタバースを利用して自宅から、例祭のお神輿担ぎ体験を可能にし、国内外への発信を見込む案だ。このような3つの案を通し、大原地域の活性化と関係人口の増加を図り、将来的には大原神社とあぶらやが、地域の人のサードプレイス、関係人口の第二の故郷になることを目指す。

用して行う運送サービスであり、令和4年1月末時点で、会員登録数は152人(平均年齢79.5歳)、ドライバーは計24人(男性20人、女性4人 平均年齢67.5歳)となっている。「みわひまわりライド」の課題として、女性ドライバーの数が少ないことや、ドライバーの高齢化があげられる。提案としては、制度を知ってもらう取り組みをし、利用者・ドライバーの増加を図ることである。



学生の気づき

今回三和町について学習して、三和町の取組や課題から特徴的な部分や他地域の課題と関係している部分の両方あると感じ、地域を多面的な視点で見ることが必要だと思いました。私は大原地域の観光の取組について考えたのですが、地域の現状と住民の思いに基づいて地域の発展のためにどのような方向性でアプローチしていく方法があるのかを考えるのが難しかったです。取組の可能性として様々な案は浮かぶのですが、実際に行うことや地域への負担、継続性等現実的に考えていくと難しいものばかりでした。今回の提案では私たち学生ができる取組を挙げましたが、今後地域について考えていく際には住民の方の思いや現実的な難しさ等様々な要素を考慮すること、そして現在の社会の状況等も踏まえ、最適な提案をできるように学んでいきたいと思いました。

（地域経営学科1年生 岡田 唯花）

約1年間の演習を通して、三和町における地域理解及び課題解決に関して熟考でき、地域の方々が各分野で誇りを持ち、地域に働きかけている現状に気づくことができた。また、講義としては、経営目線で捉える場面が多く、毎回新たに得られる知見があった。チーム活動として、当初は大原・民泊チームに所属し、主に「あぶらや」さんについて調査した。個人としては、集客や知名度向上の面で、充実した地域資源から、様々な用途・コンテンツの活用を見出すことができた。加えて、後期からはSEASONチームに所属し、地域×農業のあり方について考えることができた。万願寺甘とうだけでなく、葡萄ジュースにも着手し、クラウドファンディングを成功させている点から、将来は三和ブランドの構築、農業のまちの確立も可能であると感じた。自身の地域視野が変革化した、三和町での経験を今後の活動においても活かしていきたいと考える。

（地域経営学科3年生[編入] 三宅 泰輔）

福知山市三和町の地域課題

担当者名

亀井 省吾
軍司 聖詞

地域との協働実践を通して プロジェクトマネジメントを学ぶ

担当者名

藤島 谷口
光雄 知弘



福知山で取り組まれている防災活動の調査と体験

このグループでは、福知山の災害の歴史と災害対策の現状を地域の方のお話を伺い知識を深めたうえで、地域防災マップの取り組みについて検証し、実地調査を行った。その際にはマップに記載されている危険箇所の確認を行うと同時に、マップ上にはな

い危険がないかを確認しながら調査した。また、荒木地区の植栽事業に参加してもらい未来に繋がる防災対策を体験することができた。これらの取り組みを通して災害や防災に対する多くの知識と経験を得ることができ、防災意識を高めることができた。



桃映地域公民館との協働でつくる多世代交流の場 ～フリーマーケット&ふれあいコンサートでの実践～

このグループでは、12月12日に桃映地域公民館で行われる「フリーマーケット&ふれあいコンサート」に参加し、大西館長の協力のもと、自分たちで考えた企画を実地した。

地域住民と学生との交流の場を作ることを全体の目標として、カフェを運営する「ほっと一息チーム」と2.5mの立体ツリーをメインにクリスマスツリーを製作する「桃映ふれあいツリース」の2グループに分か

れて活動し、アンケート調査を行った。

このイベントに参加したことで、公民館や地域の現状と課題を知るとともに、大学生として地域のために何ができるのかを改めて考える良い機会となった。また、実際に自分たちでイベントを行うことで得られた学びも多くあったため、今後の活動でこの学びを活かしていきたい。



地域での新たなつながりを生み出す取り組み ～大正地区つながる広報プロジェクト「あんたが大正！」～

大正地区公民館チームでは、コロナ禍の今だからこそできる、新たなつながりの創出を目指し、大正公民館広報部野々村さんのご協力の元、活動に取り組みました。Instagram「あんたが大正！」での活動では、地域に住むおもしろい人に取材し、インタビュー記事を作成しました。その記事を共有することで、住民同士の思いがけ

ないつながりのきっかけや、人的地域資源を発掘することを目的としています。大正公民館まつりを企画する活動では、地域の方々にとって「まつり」「つながり」とはどういった存在なのかを考える対談を開きました。コロナ禍の今、地域にはどのような交流の場が求められるのかを深く考えるきっかけとなりました。



学生の気づき

私はこの1年間の演習を通して、フィールドワークを行うことの重要性を学ぶことができました。実際に自分の目で見て確認し、自分で行動することで初めて目にすることができることや情報、体験などがあるのだと知ることができました。また、全ての取り組みに言えることですが、人と積極的にコミュニケーションを取り交流をはかっていくことが地域で活動していく上で重要であると思いました。人との縁を大切にしていくことで、新たな活動のきっかけや交流が生まれる可能性が増えるのではないかと考えます。

私は後期防災チームで活動しました。このチームでの活動のおかげで防災についての知識が増え、防災の大切さを改めて知ることができ、貴重なお話しもたくさん聞くことができたので大変実りのある演習でした。

今後も積極的に地域に出て地域の人と交流し、自分やチームの人の考えだけで行動するのではなく、地域の人の声や意見に耳を傾け参考にしながら後悔のない活動にしていきたいと思います。
(地域経営学科3年生[編入] 小熊 紗祈)

私がこの1年で最も印象に残った内容は、もちろん桃映地区での課外活動である。構想から当日の運営まで約2か月の出来事だが、体感ではもっと長い時間であったように感じるほど、そこでの経験と学びは濃密なものであった。そこでは、公民館の方々や中学生の方々と一緒に活動をし、その中で、地域で主体的に動くことの難しさとコツを学んだ。特に強く思ったのは、マルチタスクの処理方法である。仕事で複数のグループと交流が必要な場合、並列して仕事を受け持つことがある。そうなったとき、各情報や仕事のベース配分を整理する能力が必要になる。相手の都合に合わせ、効率よく仕事をこなすことが、いろいろなグループと共同で作業するうえでは必要なのだ分かった。

2年次以降はゼミの活動で今後さらにグループでの主体性や、マルチタスクの処理能力が必要になってくると思うので、ここで得た知識と技術を、ゼミの方で発揮し、次の学びにつなげていきたいと思う。
(地域経営学科1年生 中村 心)

福知山市・大江地域での学び

担当者名

山田 倉田
篤 良樹



活動内容・テーマ

【前学期】

- ・ 福知山市、大江町、三和町、夜久野町の地方行政に関わる当事者の方たちによるレクチャーが行われた。
- ・ 日本の人口減少問題、それに対応する関係人口創出策、研究における問題意識と課題設定、プレゼンテーションの技法などに関して、教員によるレクチャーが行われた。
- ・ 各回のレクチャーが終了した後は、グループ討論などを行って理解の深化が図られた。
- ・ 大江町河守地区、元伊勢内宮、毛原地区、佛性寺地区を訪問し、現地の方に案内していただき視察を行った。

【後学期】

- ・ 前学期の学習を踏まえて、4つの班に分かれて、個別研究テーマを設定して研究を行った。この過程で、統計資料、文献資料、現地インタビュー調査を活用した取り組みが行われた。各班の研究テーマは以下の通りである。
- ・ 1班：大江町の地域交通の便をよくするにはどうすれば良いか
- ・ 2班：自治区における活動の持続可能性に係る考察：大江町毛原地区の取り組みを例に
- ・ 3班：大江町の水害対策：蓼原地区を例に
- ・ 4班：大江町における小中一貫校の少人数教育の実情：大江学園の事例



学生の気づき

私がフィールドワークを通して学んだことは、事前学習の重要性です。地域を訪れるということはすなわち、自分自身がその地域を取り巻く問題の当事者の1人として現状を具体的に理解できる貴重な機会をいただくということです。だからこそ、現場に向かう準備として、インターネットや文献を利用してその地域の基礎情報を把握し、何らかの問題意識を自分の中に醸成しておく必要があります。その点においてフィールドワークは、単に訪問して現場の方から一方通行で情報を得る「見学」とは違います。ただし、事前学習の際には、情報の信憑性にも留意しなければなりません。真偽を問わずさまざまな情報が社会を飛び交い、それらを取捨選択する必要がある中で、私たちには複数の情報を照らし合わせながら、より正しい情報に迫る力が求められていることにも気づきました。正しい情報を抽出し、現場で理解を深めることがフィールドワークの意義であると考えます。
(地域経営学科1年生 小林 航也)

私たちCクラス2班は大江町を調査の対象とし、毛原地域に着目して、インタビューやネットで調査した。私が特に感じたことは、インタビューと下調べの重要性である。今回インタビューさせていただいたのは毛原地域の自治会長さんであったが、質問とは違うところで、他の質問の答えが聞けたり、より詳しい説明があったりと、非常にまとめやすいインタビューであった。これは下調べをしっかりとっていたからこそできた質問であり、自治会長さんの答えを理解できたのも、事前の準備のおかげであると感じた。仮説を立て、それについて検証し、まとめていくのは時間を要するものであるが、調査方法の一つとしてインタビューを行えたのがいい経験になった。現地の人の声を聴けたこと、コミュニケーションを学んだという面から、インタビューをするまでの過程は今後の調査にも生かしていきたい。
(地域経営学科1年生 佐々木 大志)

北近畿の医療福祉における地域協働の基礎知識習得とその実際

担当者名

星 川 岡
雅 島 本
文 典 悦
子 子 司



活動内容・テーマ

当Fクラスは医療福祉経営学科学生の単独クラスである。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、地域における医療・福祉の現場への訪問や協働活動などが困難な状況において、前学期は、現場の方に遠隔でお話を伺う、教員が医療・福祉の基礎知識を講義するなど座学中心でスタートした。後学期の始めには、医療福祉経営学科の学生の多くが目標とする資格「診療情報

管理士」の学術大会に遠隔で見学するなど、コロナ禍でなければ得られない経験をした。そして後学期、感染者数が大幅に減少したタイミングで、宮津市・三和町への現地研修に赴き、事前学習（座学）で獲得した知識を、実感を伴う経験につなげた。本報告では、最も印象に残った経験や学びとして学生がチョイスした内容を中心に報告するものである。

学生の気づき

地域経営演習の授業・フィールドワークを通して、多くのことを学んだ。実際の診療情報管理士の方の話を聞いたときは、自分が調べて知っていた情報のほかに実際に働いているからこそ言える現場の声がとてもためになった。また、診療情報管理士を目指すうえで、やっておくべき、やった方がいいことという話はとてもありがたかった。ZOOMにて各市町の社会福祉協議会などの代表の方の話を聞いた際は、知らないことが多く、自らの勉強不足を感じるとともに自分の祖母を思い出し、この授業での経験が、将来必ず役に立つと感じた。フィールドワークでは、天橋立や大原神社を訪れたが、観光目的でなく、社会福祉協議会三和支所の訪問や現地を見る経験ができるなど、身になることも多かった。多くの体験をした中で、私が最も関心を抱いたのは大原神社でみた、「産屋」である。「産屋」はなぜ存在したのか、何のために生まれたのかなど、来年度は川島ゼミの配属となるため、この点についてより深く調べたいと思う。

（医療福祉経営学科1年生 尾立 匡陽）

地域経営演習において、最も心に残ったのは、市立福知山市民病院の診療情報管理士である瀧口さんから、診療情報管理士の仕事内容や、診療情報管理士になるために必要なこと、医療機関が診療情報管理士に求めるものについてのお話が聞けたことである。診療情報管理士は、医療分野のIT化が進行する時代においてとても重要性が高く、病院にとって必要不可欠な仕事を担う。そのため、医療機関は診療記録の適切な管理や統計資料を作成し、そのデータを生かすことを診療情報管理士に求めている。医療機関が診療情報管理士に求めるような人材になるために、パソコンのスキルの向上や、医療に関心を持つことが必要である。この講義で、実際に現場で診療情報管理士として働いている人のお話を聞くことができたのは大変ありがたいことであり、将来診療情報管理士になりたいと考えている自分にとってはとても役に立つ情報ばかりだった。そのため、今回聞いた話を思い出して診療情報管理士の資格取得に励みたい。

（医療福祉経営学科1年生 大月 実桜里）

廃校活用・空き店舗活用・パーキングエリア活用から考える地域課題プロジェクト



✓ 廃校活用から生まれる川合の可能性 ～川合がいつまでも川合であるために～

近年、少子高齢化により、全国で学校の統廃合や廃校が増加している。福知山市も例外ではなく、ここ数年学校の統廃合や廃校が増えている。そこで本プロジェクトでは、三和町にある旧川合小学校をターゲットとし、全国と福知山市内の廃校活用の現状、旧川合小学校の概要、先進事例、実際に行った活動内容を整理した上で旧川合小学校の活用方法についての提案を行った。

✓ 六人部パーキングエリア×新商品「ムトベリー」 ～コロナ禍でもお祭り気分～

現在、舞鶴若狭自動車道にある六人部パーキングエリアでは、上り線（神戸方面）と下り線（舞鶴・若狭方面）で食事メニューを変えるなどの工夫をこなし、利用者を楽しませるためのこだわりが注目を集めている。そこで本プロジェクトでは、六人部パーキングエリアをターゲットに、福知山市の魅力が伝わるようなアイデア、新商品である『ムトベリー』の提案を行った。

✓ 福知山公立大学ほうかご支店 空き店舗活用プロジェクト きんゆうカフェ

近年、インターネットバンクなどの隆盛により、地域金融の空き店舗が増えている。一方、日本においては、金融教育が乏しく、大学を除けば、お金や経済について学べる機会は多くない。そこで、

本プロジェクトでは、京都北都信用金庫の旧掘支店を対象に空き店舗活用のアイデアとして「きんゆうカフェ」の提案を行った。

💡 学生の気づき

このEクラスのメンバーとは、入学時からずっと一緒に活動してきた仲間であり友達です。そんな彼らと、この1年間活動してきた経験はとても印象深いものでした。

前期では、今回行った3事業それぞれについて現地の方々からお話を伺ったり、視察調査を行ったりしました。その時はまだ福知山に來たばかりだったため、友達作りと福知山の魅力を発見することにも繋がりました。後期では各事業それぞれ分かれることになり、私は遊休店舗活用を選択しました。企画の関係上、京都北都信用金庫様や近畿高校さんへのメールや電話でのやり取りが非常に多く苦労しましたが、いずれ将来にも役立てる経験を積ませて頂けたと考えております。

最後に、企画内容などでメンバーと頭を悩ませたりすることも多くありましたが、指導して下さった杉岡先生・鄭先生ご助言頂きありがとうございました。次年度以降の地域経営演習にも繋げていければと思います。

（地域経営学科1年生 吉見 光洋）

私たちのグループは、六人部パーキングエリアでの新商品「ムトベリー（いちごあめ）」を考案しました。後学期からの活動であったため、実際にムトベリーを作成・販売することはできませんでしたが、商品を売るときのコンセプトや価格、商品を販売する際のカロリー表示などの課題点をチームの人たちと話し合い、納得のいく商品の構想が練れたのはよかったと感じました。ムトベリーは六人部パーキングエリア、THE610BASE、大学生がともにかわった商品という新しい発想と、話題性で新たな顧客が増えることを期待し、実現できればよかったと感じています。新商品を考案する上で、販売するにあたっての決まり、人手問題、企業と企業の連携など、考えなくてはならないことがたくさんあるということに気づきました。自分たちが主体となって新商品を考案することはとても貴重な経験で、経営についての学びをこれからもっと深めていきたいと思いました。

（地域経営学科1年生 岩切 麻裕）

担当者名

杉 鄭
岡 年
秀 皓
紀

企業活動と社会課題 ドメイン変遷とイノベーションの観点から



地域経営演習Ⅲ・Ⅳの活動紹介

地域経営演習Ⅲでは、グンゼ綾部本社の記念館・博物苑を訪問し、創業から今日に至る事業を理解した後、同社ドメイン戦略の変遷を事業ポートフォリオマトリクスを用いてチーム分析しました。さらに、未来像を考察する中で、グンゼ研究所の先端研究を

題材に用途開発を考案し、提案プレゼンテーションを実施しました。地域経営演習Ⅳでは、地域の先進的な中堅企業について、「探索と活用」理論フレームから分析を実施し、両利き経営について実証研究してきました。

地域経営研究Ⅰ・Ⅱの活動紹介

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、イノベーションと社会課題の関係性について、現場フィールドワークのほか、経営者やマネージャーとのディスカッションから学んできました。具体的には、今日の環境におけるサーキュラーデザインの実現について、デザイナー集団（NLP）の活動をネットワーク理論を用いて分析考察し、その成果を情報社会学会にて発表しました。

学生の気づき （地域経営研究Ⅰ・Ⅱ学会発表について）

大きな舞台で発表させていただくことができて大変光栄に思います。社会文化起点型というものを意識して企業で活躍できる人材になりたいです。

（地域経営学科3年生 小澤 大海・田村 輝・神喰 梨花）

循環型経済について座学だけでなく、フィールドワークを通して深く理解することができました。また、チーム内にて協力し学会発表を行うことにより質の向上、知識の定着も達成されました。

（地域経営学科3年生 上野 雄暉・成瀬 花音・田中 遼平）

循環型経済を始めとした理論について、自分の言葉で解釈し、理解を深めることができました。今後の活動に生かしていけたらと思います。

（地域経営学科3年生 岡本 唯杜・胸谷 光樹・坂野井 利緒）

論文作成にあたり社会文化的起点型のイノベーションプロセスの知識を深めることができました。今後はインプットした知識をアウトプットしていくことを意識していきたいです。

（地域経営学科3年生 伊藤 空雅・越智 紗希海・久保 あずさ）

担当者名

亀井省吾

福知山市の人口減少を食い止める ～子育て世代を応援！子どもを守る家！！～

福知山公立大学
地域経営学部 地域経営学科
井上ゼミ

藤本 実優 ・ 大島 七南 ・ 福田 佑乃
翠川 仁美 ・ 小谷川 晟



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ

井上ゼミの地域経営演習Ⅰ・Ⅱは、主に、①管理会計理論の修得、②財務情報および非財務情報の定量的・定性的分析手法の理解、という2つの要素から構成されます。

①については、教科書を毎回輪読し、担当箇所を発表することで、管理会計理論の概要を理解し、プレゼンテーション技術の修得を図っています。

②については、財務情報および非財務情報の定量的・定性的分析によって地域の現状と課題を把握し、課題解決力の修得を図って

ます。今年度も大学コンソーシアム京都が主催する「京都から発信する政策研究交流大会」出場に向けて、地域課題の分析、資料作成、プレゼンテーション等の演習を行いました。

具体的には、定量的なデータを分析し、福知山市では近年、合計特殊出生率が上昇傾向にある一方、総人口は減少傾向にあるという課題を明らかにし、福知山市役所のアドバイスを踏まえ、子育て世代を応援する「子どもを守る家」という政策提言を行いました。

学生の気づき

今年度のゼミでは、前学期に管理会計、後学期に京都から発信する政策研究交流大会に取り組みました。

前学期に行った管理会計では、章ごとに発表者を決め資料を作成し発表を行いました。1人で資料をつくり発表することで、責任感を持ち深く詳しく学ぶことができました。また、人の発表を聴くことでより深く学ぶことができました。

後学期に行った政策研究交流大会では、学生内でテーマを選びパワーポイントでの資料を作成しました。資料作成の段階で市役所へのインタビュー調査なども行い、市の現状や実際の話を聴くことができました。本番では、他大学からの質疑応答を行い、他大学の発表も聴くことができました。そこから、今の私の思考が本学だけで思いとどまっていたと考えることができ、思考をさらに広げることができたと思い、とても有意義な学習をすることができました。

（地域経営学科3年生 大島 七南）

今回のゼミで1番印象に残っていることは「京都から発信する政策研究交流大会」に参加したこと。コロナ禍の影響で、オンライン開催となってしまいましたが、YouTube配信などといった時代に合った方法で発表することができました。提言内容を決める時や、発表資料作りなど、ゼミのメンバーで協力する機会が多かったのですが、和気藹々と意見交換することができ、自分の中でも新しい発見や価値観の構築ができました。提言するにあたって、該当部所の市役所の方にインタビューすることができ、学生側に無かった視点や、今まで市役所で行ってきた活動・制度等お聞きすることができ、提言内容の意義付けに結びつけることが出来ました。

コロナ禍で元々予定していたフィールドワーク等が中止となり思うように活動出来なかった点ではありますが、ゼミのメンバーと井上先生を含めて意見の擦り合わせや協力した活動ができ、より良い学びに繋がったと思います。

（地域経営学科3年生 翠川 仁美）

福知山市の人口減少を食い止める 子育て世代を応援！子どもを守る家！！

担当者名

井上直樹

人口減少・人口移動を労働者開学の視点から考える



活動紹介

本年度は労働市場における需給調整メカニズムの研究、とりわけ、農村と都市との間、過疎地と人口集中地域との間の人々の空間的な移動という側面を中心に研究を進めていくことを目指した。このテーマに近づくために、社会学、労働経済学、労働地理学の基礎文献からスタートして、大学卒業者の新規採用制度に関する歴史的

変遷、全国移動型の労働者派遣事業、地方レベルの雇用創出政策や関係人口創出政策、日本人女性の海外就労の状況、北近畿地方を含む人口減少地域における外国人労働力の受け入れ状況など、具体的なトピックを取り上げて、文献購読と討議を重ねた。福知山市内の廃校跡地利用の事例について、若干のフィールドワークも行った。



学生の研究テーマ

3年次の最後の数回で、各自の卒論テーマ報告を行った。以下のような研究テーマが提出された。

- ・中国の都市と農村の所得格差
- ・AIがもたらす社会への影響についての考察
- ・ノスタルジアと観光について：日本における地方活性化政策の現状と今後
- ・労働者の属性についての考察：国家間の比較と問題点
- ・伝統工芸産業の持続可能性：職人という職業のあり方
- ・日本での障害者雇用についての考察
- ・技能実習制度の現状とこれから：ドイツ移民受け入れから考える
- ・階層意識と階級意識
- ・フレックスタイム制と在宅勤務の同時運用による期待効果



学生の気づき

最終回のゼミにおいて、今年1年のゼミを振り返るフリーディスカッションを行った。次のような意見が提出された。

現地視察（学校の跡地を利用した製菓工場の見学）が最も印象深いイベントだった。

ジョブカフェによる若年者への就労支援事業について始めて知り、適職を見つけることの難しさに気づいた。

テレワークの試みは、感染症対策以前から、それとは関係のない文脈で行われてきたことを知ることができた。

文献を精読して、正確な要約を作成する、という基礎的能力をもっときちんと身につけたい。

福知山から考える世界と多様性 ―異文化理解の視点から―



担当者名

渋谷 節子



ゼミの活動紹介

私たちのゼミでは、異文化理解をテーマとした文献購読、地域でのフィールドワーク、個別テーマの研究発表会などを通して、日本や世界の様々な文化について学びながら、多様な人々が参加できる地域社会づくりについて1年間にわたり議論し、考えてきました。文化の概念は広く、芸術や言語、宗教や習慣だけでなく、政治経済活動や物事の考え方といった価値観、そして人間関係まで含



学生の気づき

特に印象に残っていることは「宗教」について学んだことだ。それまで、私は、何か特別なことを信じたり、祈ったりすることもないため、宗教は縁遠いものだと思っていた。だが、考えていくうちに、パワースポット、大安の日に結婚式をしたがるといった「自分の手には及ばないもの」を無意識のうちに認めて祈ってきた、宗教そのものをしてきたことに気づいたので、とても驚いた。また、海外の魔女狩りやアザンデの人達の文化を知り、今では有り得ないと思われることでも、この社会で極めて重要とされている仕組みを蔑ろにした咎で裁かれているという点では今も昔も変わらないということも知った。そして、今も昔もそうあらねばならないといった「宗教」があるものの、それは変わりゆくものだと学ぶことが出来た。異文化理解には様々な問題もあるが、このゼミを通して、少しずつ異なる文化を持つ人を理解出来るようにしたい。

（地域経営学科3年生 西浦 悠佑）



学生の研究テーマの例

まれます。また、異文化という外国の文化だと思われがちですが、異文化は私たちの身近にもあるもので、異文化を理解することは他者を理解することです。そこには様々な難しさもあり、そうした問題についても考えています。ゼミ生の研究テーマは幅広く、活発な意見交換をしながらお互いに学び合っています。

【2年生】

ホイアンのランタン祭り・お雑煮について・日本と諸外国のスポーツの文化・世界の伝統衣装・世界の食文化・世界の給食・イスラム法シャリア・LGBTへの理解について・宗教からみた同性愛・世界各地のお正月・韓国の料理・キリスト教の祭日・「駅伝」について

【3年生】

インバウンドと異文化理解・言葉と文化・世界の地域活性化事業・日本の少年法や労働者問題・世界の音楽・日本の音楽業界・外国人労働者・神話と日常生活の関わり・香水・移民の教育・グローバル化・世界のロイヤルファミリー・認識傾向・南極・移民の教育

文理融合型経営学の展開

担当者名

鄭年皓



地域経営演習Ⅲ・Ⅳ： 文理融合型経営学の演習

本演習では、経営学・経営科学の諸理論と分析アプローチに基づき、「文理融合型経営学」に向けた前提知識を学習している。「地域経営演習Ⅲ」では、経営戦略・ビジネスモデル・マーケティング・経営組織論等について基礎的な内容を学習するとともに、関連した入門書や論文を読んでいる。「地域経営演習Ⅳ」では、前期で学んだ内容をゲーム理論や情報理論に拡張するとともに、統計・確率に基づく計量的分析のための基礎知識を学習している。これにより、定性的理論と定量的理論の基礎を兼ね備えるための文理融合型学習を展開している。



地域経営研究Ⅰ・Ⅱ：文理融合型経営学の深化

本演習では、「地域経営演習Ⅲ・Ⅳ」の延長線で、「文理融合型経営学」の知識を深めている。「地域経営研究Ⅰ」では、経営戦略・ビジネスモデル・マーケティング・経営組織論等といった問題に対して、関連した専門書や論文を読むとともに、多変量解析の諸アプローチやマルコフ連鎖のような計量的分析を学習している。「地域経営研究Ⅱ」では、前期の内容を深化させた内容を学習している。これにより、豊かな発想力と鋭い分析力を兼ね備えた文理融合型人材の育成をめざした教育活動を展開している。



学生の研究テーマ

- ・商店街の活性化(イベント・PRの活用方法)
- ・ドラマやアニメの聖地による観光効果



学生の気づき

2年次では前期で経営戦略や組織等の理論等といった基礎的な部分を学び、後期では3年次でおこなう分析の基礎的な部分(線形回帰分析等)を学んだ。計算式の展開もゼミの講義内で資料を用いた説明があり、計算課題を通して自分でも確認することができたので良かった。3年次ではさらに高度な分析をおこなうことになるので、再度復習と基礎的な数学知識(ベクトル等)を身に付け備えたいと感じる。

(地域経営学科2年生 下道 司)



まちをもっと楽しく面白く。
コミュニティをデザインしよう。

担当者名

谷口知弘



地域経営演習Ⅲ・Ⅳ プロジェクトの紹介

①スキマ活用プロジェクト

街に存在するスキマを活用する方法を試み提案することを目的に活動してきました。広小路商店街でのイベント「広小路テラス」での写真展「広小路メモリーズ」と遊休農地で野菜を育てた「UQ農地活用プロジェクト」の2つを実践しました。

UQ農地活用プロジェクトは、来年度以降は、ゼミのプロジェクトから離れて活動を続けていこうと考えています。

②多世代交流プロジェクト

近年、地域住民同士の交流が減少しており、地域住民と交流することで高齢者の健康維持・生活の質の向上につなげることができます。まず福知山について知り、高齢者の方・地域の方と交流することが大事だと考えました。そこで新町・長町・広小路を中心にレコードや地域の思い出をヒントに多世代交流のきっかけになる活動を行いました。



学生の気づき

この1年間の活動はとても濃いものにできたのではないかと思います。話がなかなか進まず行動が遅くなってしまったことが多くありましたが、そこから全体を上手くまとめる方法や遅れを挽回する方法を学びました。

(地域経営学科2年生 大島 賢汰)

地域の方と交流し、多世代交流のきっかけにすることが出来ました。地域の方の情報や思い出をもとに、思い出マップ「つながるさんぽ」を作成、編集とデザインを担当しました。「つながるさんぽ」が新たな交流を行うきっかけになればと願っています。

(地域経営学科2年生 久保 心菜)



地域経営研究Ⅰ・Ⅱ プロジェクトの紹介

①Rainbow Pocketプロジェクト

Rainbow Pocketプロジェクトは福知山公立大学の女子大学生と福知山市で暮らす子育てママを、SNSを活用し繋げるという活動を行っています。今年度の活動としては、Instagramを用いた女子大学生へ情報発信や福知山ワンダーマーケットでの子育て世帯に対する憩いの場の提供等を行いました。

②リノメーションプロジェクト

リノメーションチームは、福知山市の新町商店街にある古民家を活用し、BBQなどのコンテンツを用いて、地域と交流する拠点となる活動を行っています。また、ゲストハウスなどの運営も視野に入れています。

③若者の酒づくりプロジェクト

私たちのチームでは、京都工芸繊維大学、綾部高校と協働し、綾部市に酒蔵を構える若宮酒造との産学連携のもと、若者向けの日本酒新商品開発プロジェクトを進めています。若者の酒離れが進行している現状を打破すべく、様々な活動を行っています。

本年度は実践研究を中心に行い、コミュニティデザインの重要性和可能性が理解できました。また、今後は各チームの存在意義を改めて見直し、明確なプランを立てていく必要があると感じました。

(地域経営学科3年生 三宅 泰輔)

昨年度より女子大学生と子育てママの架け橋となるべく取り組んできましたが、今年度は更に充実し、実践に移す事が出来たと感じています。地域と若者が相互に影響を与え、振興に繋がるよう以降も取り組んでいきます。

(地域経営学科3年生 坂野 茉夢)

自治体研究（基礎編・応用編）

担当者名

藤島光雄

黒部市主要課題

●子育て支援

- ① 男性の子育て参加支援
- ② 子育て支援アプリの作成
- ③ 母親の子育て相談
- ④ 子育て世帯を対象とした行事の運営



地域経営演習Ⅲ・Ⅳ：本ゼミでは、各自研究対象とする自治体を選定して、調査研究を行う。

研究対象としての自治体について

- ① 当該自治体の現状と行政課題をまとめる。
- ② 課題解決のための先進事例について、調査研究を行う。
- ③ 課題解決のための具体策についてまとめる。

● 学生の研究テーマ・気づき

宇治市の地球温暖化対策

宇治市では、地球温暖化対策として、地球温暖化の進行を食い止めるための「対策」と、地球温暖化を未然に防ぐための「防止」の両方の取り組みがされている。

現在、「宇治市第2次地球温暖化対策地域推進計画」を実施しており、2023年度を最終目標年度として、様々な取り組みを実施している。ノーマイカーデーだけでなく自転車共同利用システム「アヴィレ」を宇治市でも実施することで、年々増加している自動車の利用量の減少・二酸化炭素の排出量の削減が期待できるのではないかと考えている。

（地域経営学科2年生 吉田 楓太）

神戸市子育て支援

神戸市の現状と課題を調査分析し、「神戸っ子すこやかプラン2024」の4つの施策に焦点をあて、研究。

先進事例として、明石市独自の5つの無料化について、調査し、神戸市において導入の検討をおこなった。

（地域経営学科2年生 山田 麻衣）

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ：各自研究対象とする自治体を選定して、調査研究を行い、その行政課題解決のための具体的な提言を行う。

研究対象としての自治体について

- ① 当該自治体の現状と行政課題をまとめる。
- ② 課題解決のための先進事例について、調査研究を行う。
- ③ 課題解決のための具体策について提言を行う。

● 黒部市の子育て支援、教育、防災に焦点をあて、現状と課題、課題解決のための具体的な提言を行う。

子育て支援（一例）

- ① 子育て世帯を中心とした新たなコミュニティの形成を図る。
- ② オンラインコミュニティや緩やかな交流の場づくりは可能だが、「リラフォートふなはし」のような賃貸住宅の建設は土地の確保が課題
- ③ 新生児誕生祝い金については、金額を挙げるといった、他自治体との差別化が必要ではないかと考えている。

（地域経営学科3年生 中林 衛）

● 学生の研究テーマ・気づき

枚方市駅前の再開発

一つの自治体について研究し、問題点を見つけ他市の先行事例を参考にしつつ考察を行うという内容であったが、自治体を知るうえで学べることが多いと感じた。特に日本全国には先行事例がたくさんあり、各自治体で同じような問題が存在するのだと知ることができた。調査を進め、自分の研究対象の自治体で活かせるような先行事例を把握することで、問題の解決案を考案しやすくなった。今後はよりブラッシュアップし、公務員試験の面接時に活用していきたい。さらに、自分の研究以外に他のゼミ生の発表でも学ぶことができた。自分が研究している視点とは違った内容の発表を聞くことで、自分にはない考えや他市の優れた先行事例を知ることができた。決して自分一人ではできない学びを、地域経営研究を通じて行うことができた。

（地域経営学科3年生 中岡 陽太）

交流観光等による多自然圏（非大都市圏）の地域活性化

担当者名

中尾誠二



● 2回生7人の演習内容

当研究室では昨年度に続き『with/after COVID-19時代における交流トラベル情報の受発信』を大テーマに以下の通り「宿泊を伴ったフィールドワーク」を行った。

- 4月28日～6月10日、和歌山県那智勝浦町のゲストハウス「WhyKumano」オンライン宿泊を各人1回ずつ体験。
- 7月3日～4日6人および7月31日～8月1日1人が同宿リアル宿泊を体験。
- 7月22日～23日7人、福知山市三和町の古民家リノベーション宿「旅籠あぶらや」リアル宿泊を体験。
- 10月16日～17日4人、福知山市大江町の農泊開業予定者宅でモニター宿泊&地元イベント「てくてくウォーク」参加。
- 11月13日～14日2人、綾部市の里山ゲストハウス「クチュール」リアル宿泊&古民家リノベーション作業・「水源の里」農業体験作業に参加。
- 11月20日～21日3人、神戸市のゲストハウス「なでしこ屋」リアル宿泊
- 11月20日～21日2人、豊岡市のゲストハウス「本と寝床ひととまる」リアル宿泊

上記を踏まえ <http://linktr.ee/Aburayalnn> を仮運用している。

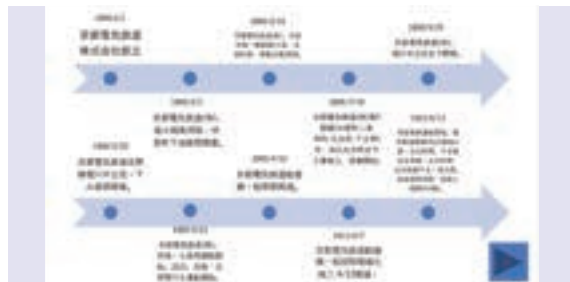
● 3回生5人の研究テーマ等

各自の進路に関連させた研究テーマを設定し、文献調査や聞き取り調査を行った。当初は全員が出身地の自治体職員等を目指していたため、当該地域の活性化に必要とされる施策を中心に、来年度の卒業研究として継続し得る対象を選定した。具体的な内容と調査日等は以下の通り。

- 7月28日、兵庫県朝来市「生野メインホール」で松下未来が『地域コミュニティにおけるサードプレイス』の現地調査。
- 10月29日および26日、福知山市「THE 610 BASE」および「里山ファクトリー」で南咲希が『廃校活用』の現地調査。
- 11月27日～28日、島根県「飯南高校」等で草間美里が『高校魅力化』の現地調査。
- 2022年1月27日、岡山県高梁市「吉備川上ふれあい漫画美術館」館長から秋山勇介が『漫画を生かしたまちづくり』の電話調査。
- 2月4日～5日、徳島県「にし阿波」地域（美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町）で安藤憧磨が『ガストロノミーツーリズム』の現地調査。

地域情報の収集・分析・伝達

担当者名
山田 篤



地域経営演習Ⅲ・Ⅳの活動紹介

情報の収集フェーズでは、各自が興味のあるテーマを決めて、それぞれが取材を行った。方法としては文献調査や現地取材などの活動を実施した。

情報の分析フェーズでは、各自が集めてきた素材を分析し、整理する作業を実施した。

最後に、情報の伝達フェーズでは、各自が整理した情報を他人に伝達するためのコンテンツとして纏め上げる作業を実施した。実装方法としては、PowerpointやHTMLを用いた。



「地域経営研究Ⅰ・Ⅱ」の活動紹介

情報の収集フェーズでは、各自がそれぞれの興味に応じた大まかなテーマを決めて、素材収集を行った。方法としては、文献調査や統計資料の調査を実施した。

情報の分析フェーズでは、集めてきた素材を分析し、研究テーマを絞り込み、研究計画を検討した。

情報の伝達フェーズでは、報告書として纏め上げることを目指し、WordやPowerpointといったツールの活用をはかる。



学生の研究テーマ

【地域経営演習Ⅲ・Ⅳ】

- ・福知山Kakugenマップ
- ・京都市電の歴史年表
- ・年度別のイベント状況から推察する福知山市の観光面の状況
- ・福知山で買えるお土産
- ・宮福線（福知山市内）の各駅

【地域経営研究Ⅰ・Ⅱ】

- ・海賊版サイトによる被害の実態と著作権教育
- ・同一概念を示す方言の分布とその要因
- ・アイドルグループとマーケティング戦略
- ・災害発生時の2輪車モビリティの有効性
- ・コロナ禍が企業経営に及ぼす影響

北近畿の多様性を知り、地域課題の解決に取り組む

担当者名

大谷 杏



地域経営演習Ⅲ・Ⅳの活動紹介

2年生のゼミでは、市町に焦点を当て、自ら文献を用いて調べる「事前調査」、実際に現地を訪れて様々なことを確認する「現地調査」、現地で得た情報や写真を使って自らの興味に従って行う「報告」の3段階で北近畿の多様性について学びます。2021年度のゼミでは、前学期に、福知山市（福知山城、佐藤太清記念美術館、丹波生活衣館、三段池公園、御霊神社）、伊根町（伊根湾めぐり観光船、舟屋と街を巡る伊根町観光協会さんのツアー）、宮津市（金引

の滝、傘松公園）、京丹後市（てんきてんき丹後、琴引浜鳴き砂文化館）、与謝野町（旧加悦町役場庁舎、旧尾藤家住宅、加悦鉄道資料館）、舞鶴市（舞鶴市郷土資料館、赤レンガ倉庫、舞鶴引揚記念館）、後学期に、朝来市（竹田城址、生野銀山）、綾部市（グンゼ博物館、あやべ特産館、綾部バラ園）、丹波市（丹波竜化石工房ーたんの館、柏原陣屋跡、丹波市立柏原歴史民俗資料館・田ステ女記念館）、京都市を訪問しました。



地域経営研究Ⅰ・Ⅱの活動紹介

3年生のゼミでは、学生自らが、地域が抱える問題を明らかにし、ゼミ単位で研究課題を設定し、役割分担を決め、文献調査やフィールドワーク（現地調査）を行い、ひとつの研究を行います。また、その成果を論文にし、大学コンソーシアム京都主催「京都から発信する政策研究交流大会」の口頭発表に応募して、発表することを目標とします。2年生までは、教員が計画を立て、旅程を組み立て、費用の管理もしますが、3年生は、インタビュー先への連絡等も含めてそれら調査に関するすべてを学生が行います。2021年度は、ゼミの人数が多かったため、2チームに分かれて研究を行いました。「北近畿の起業による地域活性化ー北近畿から始める雇用創出ー」班は与謝野町で、「これからの福知山市の観光についてー生涯学習の視点からー」班は福知山市内（芦田均記念館、福知山城、三段池公園、日本の鬼の交流博物館、元伊勢内宮など）でそれぞれ調査を行いました。



学生の気づき

このゼミでは「北近畿を知る」というテーマのもと、8つの市と2つの町へフィールドワークへ訪れた。フィールドワークへ訪れる前にその自治体について事前に調べることで、訪れるときにどういった視点で魅力に気づいたら良いかなど、ただ見て体験して感動するだけでなく、研究者らしい視点を持つことを学べたと実感した。自身を含めて7人のメンバーであらゆる内容を学び、それに対する思考を自身の分も含めて7通り得て、さらにそこから学んだ点も多かった。観光地が豊富にあり、地域の多様性も感じられる北近畿は、今求められている「地域の活性化」を果たすための資源が十分に存在していると考えられる。しかし、資源が十分に存在していても人材が不足しては意味が無い。この1年間の調査で北近畿の産業は後継者が不足している事案が多いように感じ、いま北近畿に必要なのは「人材」なのではないだろうかということ学んだ。

（地域経営学科2年生 松村 洸希）

1人1プロジェクトリーダー制による 産学官連携政策ゼミ



ゼミの活動紹介

地域経営演習Ⅲ・Ⅳ（杉岡ゼミ）・地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（杉岡ゼミ）では、「1人1プロジェクトリーダー制による地域協働政策ゼミ」をテーマに大きく文献輪読、PBL(Project Based Learning)の2本柱で活動した。まず文献輪読については、2年ゼミは、秋吉貴雄ほか『公共政策の基礎』（有斐閣、2012）、キングダム『アジェンダ・選択肢・公共政策』（勁草書房、2017）の2冊、3年ゼミは磯崎初仁ほか『ホーンブック地方自治』（北樹出版、2020）を輪読し、毎週、全員で討論を行った。PBLについては、学年の壁を超え、縦のつながりも重視しながら、①5大学インゼミ、②高大社連携

学生の気づき

私は北前船の食文化への影響を明らかにするための宮津市お雑煮調査プロジェクトのリーダーを務めました。このプロジェクトは、宮津天橋高校や宮津市、北都信用金庫職員などの方々に協力していただく、産学官連携の取組でしたので関係者同士の密な連絡を取る事が大変でした。小さなことでも直ぐに連絡を取ることの重要性を学びました。
（地域経営学科2年生 伊藤 沙也伽）

特に印象に残っているものは、高大社連携研修事業です。この活動では、高校生、経営者の方々など、自分にはない様々な視点からの意見があり、とても学びになりました。また、実際に経営者の方々のお話を聞き、事業の改善案を考えていくことで、仕事に対する新たな考え方や難しさについて肌で感じる事ができました。
（地域経営学科2年生 道林 英鉄）

一人一プロジェクト制を導入して各プロジェクトを進めたのと同時に、高校生や社会人と触れ合う事でこれから考える事が多く、働く事とは何か、地域を盛り上げていくとは何かを学びました。特に昨年度と同様の高大社連携研修事業の一環である京都中小企業家同友会とのプロジェクトでは、学年も上がり「働く」という事について各々考え、各企業の方々のロールモデルを学ぶこととなり、将来を考える良い機会となりました。
（地域経営学科3年生 深川 春輝）

高校生や中学生などの若者とのトークイベントや、経営者との対話会など多岐にわたる世代との交流を通じ、不足しがちな他世代との対話から生まれる新たな価値観の気づきが得られ、自身の成長に大きく役に立ったと感じます。一方、ゼミ内では即興性の求められる場面が多いからこそ自分の意見を噛み砕く時間が多く、ゼミのメンバーの話を創造性を持ちながら聞くという観点が忘れがちでした。
（地域経営学科3年生 本田 湧大）



ゼミの概要

地域社会の再生、企業活動の活性化を目指して、実践的能力の活用ができる人材育成が北近畿地域において強く求められている。また近年、社会や企業が求める最も必要な能力として「複雑な課題解決能力」が挙げられるが、この能力に必要なものとして思考法や経営学・マーケティングの知識をベースとした課題解決の手法がある。さらに、その解決案は客観的な根拠（データ）にも

学生の気づき

1年間のゼミ活動を通して、データ分析の重要性や、伝わりやすい資料を作ることの大切さを学びました。前期では、2回生の時から学んできた経営理論やマーケティング分野の知識を活かして、プロモーション企画のコンペに挑戦しました。このコンペを通して、効果的な企画を立案するためには、ターゲットを設定し、独創的なアイデアを考えれば、それでよいというわけにはいかず、それが採算の取れるような内容でなければならないということを改めて学び、課題に対して多角的にアプローチすることが大切であると感じました。後期では、マーケティング分野の知識をもとにした業界分析や企業分析を行いました。興味を持っている業界以外についても分析する機会があり、様々な業界の構造や、企業のビジネスモデルについて学ぶことができました。次年度においては、より深く業界や企業について分析していきたいと考えています。
（地域経営学科3年生 西本 匠）

3回生のゼミ活動では、伝わりやすさを重視した資料作りや基礎的な資格の取得、企業分析等を行いました。前期の販促コンペは、それまでに学習したマーケティングの知識などを使ってチームでアイデアを出し、課題解決能力やクリエイティビティを高めることを意識して取り組みました。後期は業界分析や企業分析を行いました。自分が興味を持っている業界や企業について詳しく知ることが出来ただけでなく、他のゼミ生が選んだ業界についてもビジネスモデルや課題等を調べたことで様々な業界について学ぶことができました。最終課題では企業のビジネスモデルを経営理論に落とし込み体系的に説明することを試み、理論と実践を結びつけて考えることができました。この1年間のゼミ活動で、社会に出て必要となるスキルや、就職活動において企業を選ぶ際や自己PRをする際に役立つ力をつけることが出来たと思います。
（地域経営学科3年生 政岡 あやの）

キャリアパスを意識した能力開発

担当者名
加藤 好雄

観光地域づくりを巡る諸問題を考える



地域経営演習Ⅲ・Ⅳの内容

2年生ゼミでは、観光学やデスティネーションマネジメントに関する基礎的な文献を輪読し、観光に関する基本概念や観光地のマネジメントに関する理解を深めました。さらに、観光地のブランディングに関する理論を学習しました。ほかにも、統計資料の収集や現地調査等を行い、観光地域づくりの現状と課題を調査・分析しました。

プロジェクトの紹介（伊根町・夕ヶ浦）

2年生・3年生の合同ゼミを隔週で行い、2つのプロジェクトを進めてきました。一つは、伊根町をフィールドにしたお土産づくりです。今年度は、旅行後にも、伊根町を思い出してもらうために、フォトブックの作成を行っています。もう一つは、京丹後市



地域経営研究Ⅰ・Ⅱの内容

3年生ゼミでは、卒業論文の作成を目指して、研究および調査の方法を学習した上で、各自の研究テーマに関する調査や分析を行ってきました。教員との個別面談を通して、各人の研究テーマを深掘りし、よりよい「問い」を検討してきました。また、前期と後期に各1回ずつ、ゼミ内の進捗報告会を開催し、ゼミ生相互での質疑応答にも取り組んできました。



学生の研究テーマ

本ゼミでは、京都府と兵庫県の67市町村の産業連関表を作成を通じて、『「市町村産業連関表」作成に関する方法論の開発』を行った。
作成方法は先行研究では統一されておらず、未だ研究途上にある。そのため推計の際に使用する他統計についての妥当性から検討をはじめ、結果として「特定部門の市内生産額」、「政府最終消費支出」について新たな推計方法を提示するに至った。先行研究で示されるどの方法よりも適当といえる推計方法を自分たちで考案し、それに基づいて67もの市町村の産業連関表を作成した点

学生の気づき

本年度は平成23年、平成27年における京都府26市町村と兵庫県41市町村の産業連関表の作成を目標として取り組みました。膨大な作業量であるため、正しくない数式をたててしまったり、工業統計を使用しなければならぬ部門について経済センサスをそのまま使ってしまったりと、他のメンバーとのWチェックのときに手間を取らせてしまいました。まとまった時間が必要であったため、春と秋にゼミ合宿を行い、その期間において生活の中心を産業連関表にすることで、作業効率を上げることができてよかったです。コロナ禍でありながらも、ゼミ合宿を行うための環境を提供して頂いた辻家や民宿の方々には感謝しかありません。また、他大学の先生と交流したり、他大学の学生にデータ提供したことで卒論の謝辞に「三好ゼミの皆さん」と記してもらったりしたことで、来年に向けてさらなる努力が必要であると感じました。

（地域経営学科3年生 安田 光佑）

は、大きな成果である。

技術的な開発に終始したとはいえ、作成した産業連関表は各地域にとって貴重な統計データとなることはいうまでもなく、産業連関表の作成方法に関する研究を飛躍的に発展させた点において、学術的意義はきわめて高い。また、理論的理解が欠かれない研究分野でもあるが、メンバー同士で意見や議論を重ね、1つ1つの作業の意味を理解しながら進めていた点に、大きな成長をみることができた。

私は、今年度から本ゼミに参加し、市町村産業連関表を作成しました。昨年度までの2年間、あまり勉強してこなかった上、途中参加で知識量も少ない中、他メンバーと同じペースで市町村産業連関表を作成するのは、とても大変でしたが、他メンバーに教えてもらいつつ、なんとか1年間で作成することができました。

作成自体にも長時間の作業が必要であるにも関わらず、Wチェックでミスが見つかったとき、作成方法を新たに変更するときなど、それまでの作業を消して、また作業をやり直さなければならず、辛い思いをすることもありましたが、知識・経験だけでなく、完成したときの達成感、長時間の作業に耐えられる根性なども同時に得られたと思います。

また、Zoomを通じて本ゼミのOBの方々と交流をさせて頂き、良い経験になりました。特に、カリフォルニア在住の先輩が、自転車に乗ったままホームセンターに入って行ったときには、日本との差を感じ、とても驚きました。

（地域経営学科3年生 錦織 斗稀）

担当学名

佐藤 充

「市町村産業連関表」作成に関する方法論の開発 —京都府・兵庫県の67市町村の作成を通じて—

担当者名

三好 ゆう

地域資源を活用する観光地域づくり、課題解決に向けた実践から学ぶ



360度カメラを用いた河川景観のアーカイブ化

防災・減災を主要な目的とする河川整備は自然環境を配慮した河川改修などの工事を実施し、河川景観の形成・保全を重視する一方、河川景観のアーカイブ化を河川整備方針の中に取り入れる必要がある。本年度は国土交通省福知山河川国道事務所及び市河川管理課のご協力を得て、ゼミぐるみで360度カメラを用いて、由良川を下りながら、由良川の360度画像データを収集し、グー

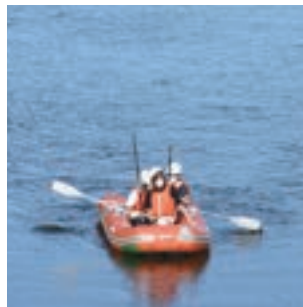
グルマップストリートビューとYouTubeにアップロードした。2社の地元新聞に記事として紹介され、多くの方に視聴してもらった。後世に由良川の現況を伝える景観遺産として活用されること目指した。コロナ禍により、流域内外の住民による360度画像の評価を把握する段階に至らなかった。今後、引き続き本活動を継続する予定である。



コロナ禍における地方観光地の現状及び課題

コロナ禍の影響が続く中、インバウンド観光需要の蒸発を受けた地方観光地の現状と課題を把握するために、感染予防対策を厳守しながら、京都府伊根町と美山町への実地調査を行った。賑やかさが失った現状に対して、ゼミ生達と「多様な背景を持つ地域住民の立場を配慮して、コロナ収束後の観光地づくりの方針」について考えた。また、重要伝統建築物である舟屋とかやぶきの

構造と保存などについて学習し、特に茅葺屋根の修復と茅葺家屋の内部を見学した。こう言った現場学習を通じて、今後、ゼミ生達と「地域の文化資源の保存と利活用を意識しながら、観光地づくりに関する地域住民全体の意識への把握を目指したい。



ビッグ&オープンデータを「さばく」データ板前を養成する

担当者名

岡本悦司



病床機能報告データウェアハウスを操作して京都府中丹医療圏の病院医療を把握する(2年生)

病床機能報告とは2014年より医療法で義務づけられるようになった、全ての一般病院と有床診療所が毎年7月現在の病院の治療実績を報告するものであり、各病院の報告内容は公開されている。その膨大なデータをExcelピボットテーブル上で自在に操作できるように加工したものがデータウェアハウスである。医療の地理的な区画は、病院→市町村→医療圏→都道府県であるが、市町村単位のデータを医療圏単位に容易に集計できる。2年生ゼミでは、中丹医療圏(福知山、舞鶴、綾部)の病院医療の実態から「高齢者に対する高額医療と2025年問題」というテーマで「京都から発信する政策研究大会」に予選を突破して発表した。入選はかなわなかったが、本ゼミでデータウェアハウスの使用法に習熟し、そのメリットを理解した上で3年生で、自らデータをデータウェアハウスに加工する技術の習得に進む。



岡本ゼミの目標:ビッグ&オープンデータを「さばく」データ板前の養成

データを魚にたとえると、1年生で魚を食べさせ、2年生で魚のつり方を教え、4年生でつった魚を寿司に握る「データ板前」に育てる、が目標である。ネットという大洋には夥しい魚(ビッグ&オープンデータ)がいるが、魚群を発見し収穫し活用するには技術が必要となる。病床機能報告では7500もの病院データが公開

されているが、右クリック→名前をつけて保存を7500回繰り返すのではなく、ワンクリックでダウンロードするAPI機能、膨大なExcelワークシートを処理するVBAプログラミング、ピボットテーブルで自在に使いこなすデータウェアハウス化処理等の技術を習得する。



地域の社会福祉的課題をみつめて解決〜中山間地域の少子高齢化問題を中心に〜

担当者名

川島典子



地域経営演習Ⅲ・Ⅳ 活動紹介

社会福祉全般を学ぶ川島ゼミ2回生ゼミでは、少子高齢化の課題を抱える社会福祉の現場での地域協働を学ぶためのフィールドワークとして、中山間地域にある夜久野町の老人ホーム「グリーンピア夜久野」や朝来市社協に赴いた。また、福知山市内で子育て支援サロンを開催しているNPO法人「おひさまと風の子サロン」および、空洞化する旧市内の課題を把握するために新町商店街にも行ってみた。3月には城崎で合宿を行い、豊岡市総務部ジェンダーギャップ対策室室長さんから豊岡市独自のジェンダー政策に関するお話を聞く。ゼミ生からは「社会福祉の現場を知って視野が広がった」などの感想が得られている。さまざまな地域協働の学びを通して、卒論では、地域における「老々介護」「ヤングケアラー」「発達障がい」「介護ロボット」などの課題をとりあげたいという具体的テーマをみつけることができた。



学生の気づき

本年度も、コロナ渦での活動自粛に左右された年になりました。そんな中でも無事にうかがえたフィールドワーク先では、多様な地域貢献の形を知ることができました。実際に福祉の現場に従事している方々から、仕事への価値観や熱意などをお聞きできた点が、最も印象深かった学びのひとつです。多様な人々が、互いに助け合って社会を創る重要性を肌で感じながら、社会福祉の視点から地域協働の大切さを学べました。



地域経営研究Ⅰ・Ⅱ 活動紹介

社会福祉全般を学ぶ川島ゼミ3回生ゼミでは、社会福祉の現場での地域協働を学ぶためのフィールドワークとして、夜久野町の老人ホーム「グリーンピア夜久野」や福知山市社協に赴いた。また、空洞化する旧市内の課題を把握するために、新町商店街にも行ってみた。アーキテンプで開店しているクラフトビールの店で地域の人と話しながら福知山産のビールを飲み食事をしたのは楽しい思い出のひとつだ。3月には宮津で合宿を行い、みねやま福祉会や子育て支援センターなどの見学にも行く。ゼミ生たちからは「社会福祉の視点から地域協働の大切さを学べた」「隣人同士の付き合いを廃れさせないことを目的とする社協の活動があることを知った」「問題を地域住民で協力して乗り越えていくことが大切だと感じた」「卒論執筆にむけて今後も地域社会で福祉的課題と実直に向き合っていきたい」などの感想が得られた。



僕は、「地域福祉政策における子育て支援に関する一考察」をテーマに卒論を書く予定です。子育て支援の分野でも、より良い地域社会の在り方への追求は当然に求められます。時代の変化や天災地変に対応し続けられる地域社会の姿を、京都北部地域を拠点に学んでいきたいです。卒論執筆に向けて、今後も地域社会での福祉課題と実直に向き合っていきたいと思います。
(医療福祉経営学科3年生 秋山 蒼)

うるし製品の製作と販売検討

担当者名

神谷達夫



ゼミの活動紹介

本ゼミでは、活動内容を検討した結果、うるしを使った新製品企画の提案を活動内容とすることとした。検討段階の製品企画では、スイーツ皿や猫関連グッズといった提案があったが、最終的にはうるしのスイーツ皿を選択した。実際の活動では、スイーツ皿の製造から販売までを検討した。詳細の製品企画では、スイーツ系を扱うInstagramに相談した。その相談結果を参考に、皿の材質や色合いを決定した。



学生の気づき

私のゼミは、活動内容の提案から始まった。福知山市のうるしやミツマタを使った新製品案などの複数の案のなかで、うるしを使った新製品の提案に決まった。私は、スイーツ皿や猫関連グッズの提案をさせてもらった。最終的に、私が提案したうるしのスイーツ皿の製造から販売までの企画をゼミの活動内容に決定した。活動内容は、始めは、資料等を調べながら、デザイン案をそれぞれ提案した。皿の材質や色合いを、うるしのお皿として実際に製造できるのが、難点であった。デザイン案決定後は、うるしの館にいき、製作した。福知山ワンダーマーケットで販売する予定だったが、コロナ禍で中止となった。この1年を通して、うるしの知識をはじめ、自分の提案に根拠をつけるための資料をみつけたり、スイーツと皿の色相性を調べるために統計をとったりした。来期の活動に活かしていきたいと思う。
(地域経営学科2年生 津久井 慈恩)

製造は、福知山市夜久野のうるしの館に依頼した。仕様をうるしの館と相談し打ち合わせしながら、製品を完成させた。フリーマーケットで販売する計画を立て、福知山ワンダーマーケットを調査した。しかし、目的の回の福知山ワンダーマーケットがコロナ禍で中止となった。このため、実際の販売には至らなかったが、製品の企画から販売までの経験をゼミの取り組みによって経験することができた。

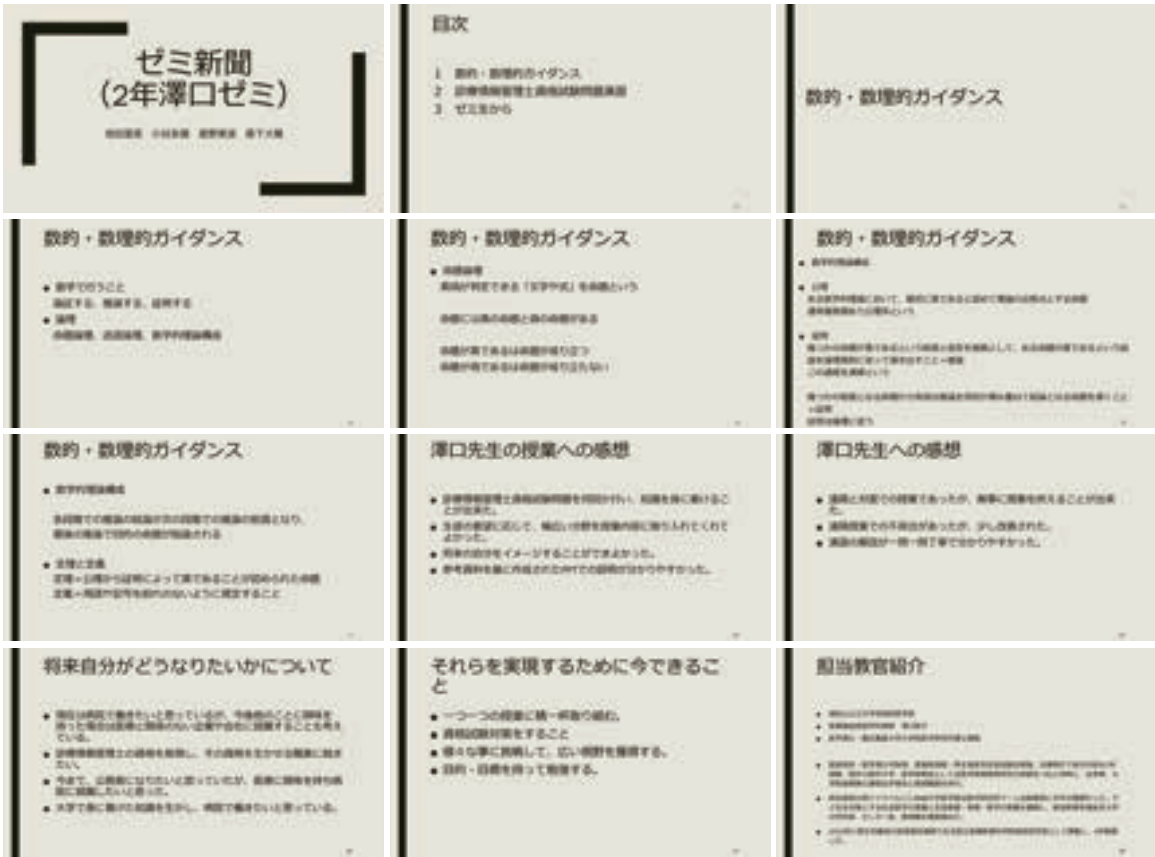
私が地域経営演習Ⅲ・Ⅳで学んだことは漆には新たな価値創造が必要であること、情報共有は非常に重要であることの2点である。1点目に関しては漆について知れば知るほど漆の将来性のなさが浮き彫りになっていったのを感じていて、これから漆が価値を持って存在するにはそもそも新たな価値を漆から見出す必要があると考えた。2点目に関しては漆の新たな価値創造を図る上で一番重要なのは漆について深く知ることだが、自分の力だけで理解するには限界がある。また、知らないことや分からないことについては他者を頼ることで解決できるケースがほとんどであるようだ。広く人から知見を得たりすることで新たな発見が生まれ、それによって新たな見方、考え方が生まれることがあるだろうからそういった可能性のためにも情報共有は積極的にすべきことであると考えた。
(地域経営学科2年生 樋口 友作)



学生が主体となって実施する調査研究

担当者名

佐藤 恵



社会と地域の課題—特に医学・医療・福祉に関する課題とアプローチを見出す

社会と地域の課題—特に医学・医療・福祉に関する課題とアプローチを見出し、卒業研究につなぐ。指導担当澤口が30代で、ドイツ統一の前夜、ベルリン自由大学法医学研究所で犯罪死体の解剖に従事した経験から、社会変容の一例として西ドイツと東ドイツの統一前後の雰囲気と統一後の社会心理をとりあげた。社会と地域の課題に医学・医療・福祉の視点からアプローチを見出す手法として次記を示した。広く勉強し各自の卒業研究課題を探索する為、1) mediaの記事から社会意識と社会問題を選択 2) オンライン論文から選択課題に関する論文を抽出 3) 抽出論文は、課題の背景に関するもの、課題に取り組む手法に関するものを選び、総じて現在までの課題の展開がどのようにしているかを理解 4) 緒言(参考文献2-3個を含む)対象と方法 結果(予想される結果)考察 結論(予想される結論)の形でまとめる。数学史のspot紹介(リーマンとポアンカレ)と地域情報学の関係、logistic回帰解析手法、数値処理の実際(標準化・欠損値処理・多変数の減らし方等)をspotで講和、AIの作り方(見知らぬ自分を見つけるAI・社会意識のAI・自分と社会をつなぐAI)とmeta-AIを紹介。



学生の気づき

診療情報管理士資格試験の様々な分野の問題を解くなかで、出題範囲も広く、資格試験の難しさを知りました。幅広く学ぶことで、自分の興味のないものについて少し理解できたと思います。次年度の地域経営研究では、医療や福祉分野についてたくさん学びたいと思いました。

(医療福祉経営学科2年生 星野 美波)

生徒の要望に応じて、幅広い分野を授業内容に取り入れていただき、将来の自分をイメージすることに繋がった。

(医療福祉経営学科2年生 小谷 友優)



広く学ぶこと・福祉を学ぶこと・自然にふれること
そして診療情報管理士資格試験勉強

15回を3回1クールとして5クールをまわした。1回は地域協働教育の手法を取り入れ、地元福知山の有力企業等の福知山における創出と成功の秘訣を探り、1回は診療情報管理士資格試験問題に触れ、1回は卒業研究に向けた学習を行った。何を学びたいかもまだつかめないという学生達の要望に応え、広く学ぶことをテーマとして、学生各位が読みたい本を読むことから、各自の出身故郷の言葉と北近畿の言葉のテキストマイニングに発展し、一部他医療資格取得試験内容も含む医学医療資格試験問題に対応した。ITとIoT、数的数理的ガイダンス、数的概念を学ぶ、AIを作る等の新しいアプローチを行った。何を学びたいかわからない時に、自分自身を見つけることが良いかもしれないと感じて、見知らぬ自分を見つけるAIのイメージングに挑戦、不足はWEBCLASS内講演会で対応する。学生たちは学ぶことを簡単に楽に感じる事ができた。

次年度からの研究に向けて、医療だけでなく、様々な分野について講義してくださり、研究テーマの幅が広がったので良かったです。授業内で診療情報管理士の資格試験問題もたくさん行い、答え合わせをするだけでなく、みんなの間違えが多かったところや、解答が不明確となったところについて、後日スライドを用いて後日先生が詳しく説明をしてくださったので、十分に理解することができました。今年度学んだことを今後の地域経営研究に活かしていきたいです。

(医療福祉経営学科2年生 池田 里奈)



研究計画から報告までの一連の作法の習得

本ゼミは、学生が自ら考え、行動することを基本とする。教員は、必要に応じて講義を行い、学習を支援した。ゼミ生は自分でテーマを選び、研究計画をたてた。それぞれの研究計画を遂行するために、学生プロジェクトに応募し、全員が予算を獲得した。取得した資金をもとに、福知山市民に対するアンケート調査を実施した。市民に向けてのアンケート調査を実行するためには、福知山市の協力が欠かせない。ゼミ生は、その要請作業や調整作業も

自ら行った。これらは、学部の2,3年生にとって初めての体験であったが、苦労しつつも克服していった。

本ゼミは、福知山市への報告書提出までをゼミ活動とする。ゼミ生は、その執筆に向けて現在準備中である。これら一連の作業は、調査研究活動の基本である。彼らにとって、有意義な学習であったと考えられる。



保健医療分野に注目した
福知山市民の意識調査

ゼミ生は、それぞれが選んだテーマに取り組んだ。3年生2名は、福知山市の合計特殊出生率の高さの要因解明と情報通信端末の使用頻度が中高年の健康に与える影響に取り組んだ。2年生は、福知山市のがん検診受診率の向上を目指して、ヘルスツーリズムの実施可能性を調査した。



学生の気づき

私はゼミで、主に2つのことを学びました。1つ目はプロデュース力です。ゼミでは、福知山市のがん検診受診率を向上させるための方策を検討しました。そのために、福知山市在住の方にアンケート調査を行い、分析や考察を行うなど、能動的に考えて行動することが求められました。企画立案から考察まで行う一連の経験は、今後の糧となると考えられます。2つ目は考える力です。アンケートの作成や集計、分析など1年間のゼミを通して思考力を養うことができました。特にアンケート発送以前は慣れない作業が多く、最善策の模索に注力していました。また、試行錯誤と同時に協調性も身につけることができました。調査に必要な準備には、多くの人に協力していただき、特にアンケート発送前と回収後は、密な連携の重要性を実感しました。ゼミで学んだ力は人と関わる様々な場面で必要となる能力であり、この学びを生かして次年度以降も頑張りたいです。

社会と地域の課題 —特に医学・医療・福祉に関する課題とアプローチを見出す

担当者名

澤口 聡子

自分で作る自分の健康・運動・栄養・休養・平時の自分の健康状態を知る



ゼミの活動紹介

前期：山陰海岸ジオパーク活動 温泉巡りとアクティビティ
後期：山陰海岸ジオパーク活動 モニター調査（京丹波市）
後期：バイタルサインによる健康管理



学生の気づき

温泉巡りとアクティビティ：1日目に行ったかぶと山は、最寄り駅から徒歩で40分ほどの場所にあり、運動不足の身体には大変なものでした。しかし、その後の温泉と食事は格別なものに感じました。2日目に行った「浅茂川温泉静の里」では、海を眺めながら温泉に入ることが出来ました。温泉施設によって、湯の温度や種類なども様々でそれぞれの特徴が現れているなど改めて実感しました。緊急事態宣言下での計画でしたが、海沿いの温泉だからこそ魅力を十分に堪能することのできた2日間でした。

モニター調査（京丹波市）：京丹波市の山陰海岸ジオパークに認定されているジオサイトの内、5つほどを見学することができました。当日は天気が悪く、高波もあったので綺麗な景色はあまり見られませんでした。波によって削られた地形や火山活動によるものなど自然摂理による特徴的な景色を見ることができました。特に、立岩の威圧感には驚きました。直近まで観に行くことができず残念でしたが、さまざまな逸話があるのも当然だと思えるほどでした。行けなかった場所も多くあるので、また行ってみたいです。

（医療福祉経営学科3年生 中垣 琴羽）

学生の研究テーマ（仮題） 3年次の実験結果は期末報告会にてポスター発表

山本麻央 福知山市健康増進計画とゼミ活動
小島未来 森林セラピー 社の癒し効果をどうやって測定するか
大石緋那 運動と健康 運動習慣をつけるためのゲームの導入
宮川理瑚 アロマセラピー 香りのリラクゼーション効果
山崎怜那 生活習慣病と食事の関係
中垣琴羽 音楽療法、音楽による高揚感とリラクゼーション効果
山本紗耶 健康と睡眠
吉岡由紀 ヘルスツーリズム 美容と健康への影響

ジオパークでの実験テーマの選定がむずかしく、後期から主に健康管理に関するテーマにしばった。年度末までに各自がそれぞれの研究テーマ（仮）を決め、試行実験を行った。結果を報告会にてポスター発表した。学生個々の取り組んだ研究テーマを大きくまとめると、「自分で作る自分の健康」である。健康増進の3要素は「運動・栄養・休養」であり、日常生活の中で健康指標としてバイタルサインの測定を基本として、運動、食事、睡眠、ストレスチェック、五感とリラクゼーションについて調査・実験を実施した。

公表されているデータから地域の医療・介護の現状、および医療機関・介護施設の機能を分析する



地域の病院が抱える課題を医療と経営の視点から検討（名桜大学とのアカデミックな交流を通じて）

COVID-19の感染拡大により実施が危ぶまれたが、名桜大学のご厚意により2021年11月22～25日に沖縄研修を実施することができた。中部徳洲会病院における見学と研修は、直前のCOVID-19感染者増により急遽中止となったが、名桜大学との研究交流会は、予定通り開催に至った。研究交流会では、当ゼミ生と名桜大学2・3・4年生による混合の5グループを構成し、グループワークを行った。テーマは架空病院のインシデント事例から、現

状の問題点、リスク分析、および改善方法に資する提案を行うものであった。学生は各グループでの議論結果をまとめ、プレゼンテーションを行い、学群長を含む名桜大学教員からご指導・ご指摘を頂戴した。他学との接点が少ない本学の学生にとって、他大学の同じ目標を持つ学生とチームを組み、病院医療やマネジメントを真剣に議論し提案をまとめる経験は、勉学へのモチベーション向上につながったものと考えられる。

施設基準の届け出状況から医療の、病院の、何がわかるのか？（地域経営演習Ⅲ・Ⅳ）

当ゼミでは今年度、新たに「施設基準」データから、わが国における医療のあり様や医療機関の特徴を探るチャレンジを始めた。厚生労働省が公開している医療機関の施設基準は約75万件ある。施設基準データとは、全国の医療機関が、自分たちが提供したい医療、自分たちの特徴を生かす医療、自分たちが地域から必要とされている医療を提供するための医療資源（人、モノ、金、情報）を積極的に整備して、それが厚生労働省に届け出られた結果である。つまり、全国の医療機関がどのような方向性で医療サービスを提供しようとしているのか、その「意思」を知る可能性のあるデータである。

今年度は、2019年と2021年のデータから、コロナ禍における「オンライン診療提供体制」「チーム医療体制の傾向」「医師事務作業補助体制加算の取得」などの変化を明らかにすることができた。

以上の研究成果は、第48回日本診療情報管理学会学術大会（高知市で開催）で発表する予定である。

保険外併用療養費の価格設定傾向を明らかにしたい！（地域経営研究Ⅰ・Ⅱ）

当ゼミでは昨年度から、データを作成する経験を積ませるため、地方厚生局から取得した保険外併用療養費の個別帳票から、利用可能な状態にするためにデータを手入力する作業を行っている。今年度も最新のデータを入手するため、ゼミ生全員で8199件のデータを手入力し、分析を行った。費用徴収の義務化対象となる医療機関が増え、データ量も増大したが施設間での大きな差は見られなかった。ただし、都道府県内でのバラつきが最大で2000円超あった。今年度は新たに「制限回数を超えたリハビリ」「180日を超えた入院」についてもデータを取得した。結果として、これらの保険外併用療養費を設定している病院の割合に、都道府県間で一定の傾向がみられた。割合が上位（例：岩手県）・下位（例：秋田県）の都道府県における医療計画や政策に何らかの特徴がみられる可能性が示唆された。

以上の研究成果は、第48回日本診療情報管理学会学術大会（高知市で開催）で発表する予定である。

担当者名

芦田 信之

担当者名

星 雅文

2021年度 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」テーマ一覧

2021年度に卒業する地域経営学部（学）の学生は、4年生科目「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」の必修科目化により、全学生が、4年次に卒業研究に取り組み、卒業論文、卒業制作報告書、プロジェクト実施報告書を、大学における学びの最終成果物として執筆しました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行が、大学における教育・研究に大きな影響を及ぼす中、11月には「卒業研究中間報告会」をオンラインにより実施し、学生が自ら進めている研究内容について報告を行いながら、進捗を確認するなど、2月の提出に向けて、各自取り組んできました。

次ページからは、4年生がそれぞれ作成した成果物の研究テーマをまとめたものです。



地域経営学科

氏名	タイトル
青木 英里奈	わが国における新しい居場所（サードプレイス）のあり方 —異日常で開かれた発話・会話が生まれる場とサードパーソンの重要性—
青木 陽亮	ファミリービジネスの事業承継 —サードパーティ・ステークホルダーの役割—
旭 拓弥	M&A実施企業におけるアメーバ経営導入の検討 —中小企業のM&Aをより有意義に—
安達 統偉	組織における個人内多様性の有用性に関する考察
安藤 快	保険業界における対面の重要性
井坂 彩乃	蓄積された社会関係資本による積極的関係人口の維持
伊澤 寛人	アフリカにおける紛争とダイヤモンドの関係
石崎 海人	コロナ禍の学生と飲食店の縁むすび「ふっこう学割プロジェクト」～コロナ禍における飲食店とふっこう学割
石野 蓮大	地方部における社会人の学び直しのあり方について
磯邊 文乃	大学生の方言使用に関する意識 —方言を守っていくために—
一井 愛哉	日本における外国人労働者の受け入れについて
一井 麻結華	大学生の食生活の実態と今後の家庭科・食育の授業のあり方
井上 由真	水産物のブランド化の現状と課題 —京都府の漁業者の今—
今村 温南	ニッチ市場における生存戦略 —美容室専売メーカーのマーチャンダイジング—
岩崎 絢哉	コロナ禍の学生と飲食店の縁むすび「ふっこう学割プロジェクト」～コロナ禍における大学生の不安
梅山 萌	子どものサードプレイスの需要と今後の姿
大槻 悠介	福知山市における地価形成要因分析 —地価形成から見る有用な公共事業の検討—
大橋 帝我	性格からみるソーシャルキャピタルと主観的幸福感との関係
大畑 真鈴	アエノコトの現状と課題解決にむけて
貝藤 蒔奈	奨学金返済の延滞状況
加藤 颯一郎	カフェと地域活性化
神本 雄大	スポーツ合宿と「食」を融合した地域活性化に関する研究
川畑 倫太郎	高卒就職者における幸福度の検討
北村 洋翔	空き家対策に関する研究 —各自治体の先進事例・福知山市の取り組みを例として—
楠原 聡	取引費用の削減とリアルオプション理論によるM&Aとグローバル展開の拡大 —種苗会社における収益性の向上と成長—

氏名	タイトル
黒川 拓馬	福知山市における災害時の多言語対応について
肥塚 里於	家島諸島における渚泊とその交通手段について
小林 蒼満	保育士の人材不足に対する取組と今後の解決策
小林 勇斗	学生の居場所づくりの研究と実践 ～福知山公立大生の交友関係から考える居場所の提案
齊藤 広樹	日本国内の就農者定着に関する考察 ー宮崎県・京都府・兵庫県の農業を比較してー
坂本 賢吾	YouTubeを活用した自治体の広報活動について ー京都府内の自治体の事例からー
直原 怜花	フィンランドと日本の初等教育の国語科の理解力に関するカリキュラムの比較検討
島 凜花	発展途上国における貧困と教育
清水 俊太	学生の居場所づくりの研究と実践 ～地域に根差した映画館を活用した居場所づくり
清水 椋太	日本におけるデポジット制度の特徴と可能性 ー持続可能な社会の構築に向けてー
眞野 稔巳	「無形の文化財」を活用した観光まちづくり
蟬丸 太一	花火大会が地域にもたらす効果の研究と実践 ～花火大会に代わるイベントの模索と可能性
高川 悠奈	業界の寡占化における企業の成長戦略 ーM&A戦略と差別化戦略の比較分析からー
高見 臨	花火大会が地域にもたらす効果の研究と実践 ～ネットワーク形成から広がる地域活性化
田川 和樹	日本の観光における危機管理制度の現状と課題 ー沖縄県における観光危機管理の取り組み事例からー
田辺 優佳	内発的コンテンツの制作による地域振興の可能性
辻 奈菜	センスメイキングによる中古住宅市場のリスク軽減 ー買取再販業における情報の非対称性の解消ー
東条 萌乃佳	福知山市における地域日本語教室の現状とこれから ー多文化共生の視点からー
遠島 玲奈	韓国の格差社会に関する考察～映画『パラサイト』から考える～
中尾 海都	コロナ禍の学生と飲食店の縁むすび「ふっこう学割プロジェクト」～学割文化の定着と先行事例
中島 龍也	物流最適化によるトラック輸送事業のコスト削減 ー物流業界におけるサプライチェーンの効率化ー
中島 亨	地方都市の商店街再興に関する考察 ー鳥取県の事例を中心にー
中島 将昭	ロケーション・ツーリズムによる地域への影響
中島 みやぎ	夕日ヶ浦エリアにおける宿泊事業者のデジタル化と地域連携に関する実態
中島 海咲	地方都市における外国人住民との多文化共生社会の実現に向けて ー外国人住民を対象にした支援・交流活動の観点からー

氏名	タイトル
永松 泰征	地域における企業家行動についての考察
西田 光輝	ニューノーマル時代の市民と自治体との協働による地域広報 ー自治体広報(PROMotion)から地域広報(Public Relations)へー
橋本 真琴	日本と韓国の食文化を通じた異文化理解、異文化交流
原田 寛之	岡山県における市町村合併と郷育(きょういく)活動による新たな可能性 ー岡山県真庭市を事例にー
福島 幹人	ふくちやま子ども食堂を実例とした子どもの居場所づくり ー高校生と子ども食堂利用者に向けたアンケート調査をもとにー
福原 元太	リアルオプションによるリーディングカンパニーの海外市場進出 ー参入障壁の確立による農業機械市場の寡占化ー
藤井 史弥	電子書籍の普及と紙媒体の書籍の新たな展開の考察 ー新たなビジネス・モデルの可能性ー
藤田 琢人	花火大会が地域にもたらす効果の研究と実践 ～市民主体の花火大会と花火大会に代わるイベントの開催に向けて
古澤 凪	組織による架空人格運用の研究
細田 菜々子	山岳宗教集落におけるエコツーリズムの発展 ー立山信仰の宗教集落を事例にー
細見 いるな	有価証券報告書と財務諸表分析から読み取る株式会社ジーエス・ユアサコーポレーションの特徴と課題
水嶋 薫子	鯖江における水島眼鏡の事業展開 ー既存技術を駆使した新規事業の開拓ー
水田 嶺央	ニューノーマルな働き方改革のあり方についての一考察 ーエッセンシャルワーカー(非医療)を事例としてー
三根 楓子	増加する図書館と減少する図書館利用のための研究
武藤 沙季	暦から考える異文化理解
村上 洋輝	大学生のコミュニケーションについて ー福知山公立大学をモデルに「他己紹介」が大学生の表層的なコミュニケーションを促進させるかー
村瀬 智也	事業承継税制に関する一考察 ー連帯納付義務の取扱いを中心にー
森實 桜	高等学校における主に頭髮に関する校則について
森本 啓太	花火大会が地域にもたらす効果の研究と実践 ～ンピックプライドの醸成から期待する地域活性化
森山 佳亮	災害時における自治体間連携 ～実行性を確保するためのシステムの構築～
山下 優也	With/After COVID-19時代のテレワーク・ワーケーションと地方振興について
山品 達哉	北陸新幹線敦賀延伸に伴う並行在来線について
山田 大貴	地域リーダーシップに見る集会的天才像の考察 ー地域に根差す企業リーダーに着目してー
山本 祐輔	農福連携はわが国における精神障がい者の雇用の受け皿になるのか ～与謝野町を事例に～
吉川 遥	特化型人材サービスの競争優位性 ー高齢者特化と医療特化の比較分析からー

氏名	タイトル
吉国 快斗	地方移住者と関係人口の創出に関する考察 ―新温泉町と阿南市の事例を中心に―
吉田 一稀	外国人労働者に対する政策の現在とこれから 外国人労働者との共生という困難
米村 美紅	自殺死亡率の推移 1994年から2019年までの都道府県別データによる分析
和多田 裕太	交通空白地における有償運送の事例と新規展開時の手法考察
飯井 誠道	COVID-19がアニメツーリズムに与えた影響と今後の展望 ～静岡県沼津市を事例として～
大澤 奏子	児童虐待の対応体制における警察の役割に関する研究
辻 廉斗	学生の居場所づくりの研究と実践 ～サードプレイスでより良い学生生活を

医療福祉経営学科

氏名	タイトル
池上 永莉	子どもの頃の食に関する経験が大学生の食生活に及ぼす影響に関する研究
一戸 清志郎	入院患者の家族は何を感じ、何を考えるのか？ ―患者家族手記のテキスト解析―
乙丸 秀晃	データウェアハウス集 ―全国がん登録―
鬼丸 日和	福岡県福岡・筑後地域において医療資源はバランスよく配置されているのか？ ―同地域における高額医療機器導入の現状から―
川井 梨央	高齢者の自殺について
木島 佑月	食生活とGPAに関する研究
栗野 志穂	データウェアハウス集 受療行動調査
近藤 宙翔	医療機関が情報システムを「導入しない理由」の研究 ―すべての病院に情報化が義務づけられる将来を見据えて―
坂本 亜衣	キャラクターデザイン・イラスト制作を用いた 地域や企業におけるキャラクター活用の研究
佐藤 智之	国際比較による福祉レジーム論の再考と、日本型福祉レジームの課題
佐藤 百菜	脂肪の過剰蓄積予防策に関する研究
清水 篤郎	大学生のソーシャル・キャピタルと主観的健康感の関連に関する研究 ―福岡山公立大生への調査を通して―
下田 晴翔	独居高齢者の支援施策 ―鳥取市の事例を通して―
高田 紅瑠美	福山市の医療を支えているのは広島県か？岡山県か？ ―病院医師の出身大学の調査などから―
武山 征広	兵庫県丹波市とその周辺地域における医療・介護連携の研究 ―福知山市・西脇市など周辺地域とのつながりから―

氏名	タイトル
橘 浩平	新型コロナウイルス感染症が献血に及ぼした影響
土屋 舞莉奈	新型コロナウイルス感染症に対する病院の感染対策に関する研究
富田 憲伸	投球障害の予防策に関する研究
西田 史佳	言葉かけによる学習意欲の活性化に関する研究
濱谷 裕一郎	北陸など地方圏において高齢者の医療は機能し得るのか ―北陸三県における療養病床の研究―
東浦 光花	兵庫県丹波市における地域医療連携の現状と問題点の研究 ―丹波医療センターが担う機能と他医療機関との関係から―
平井 優衣	わが国のオンライン診療はどの程度浸透しているか？ ―COVID-19の世界的流行を経たオンライン診療の変化に関する研究―
山下 真莉奈	舞鶴市の医療は持続可能であるか？ ―病院の機能分化と統合シミュレーションの比較から―

2021年度 地域協働型教育成果報告会

2022年2月19日(土)、地域経営学部による2021年度地域協働型教育成果報告会を開催し、学生が一年間の学びの成果を発表しました。コロナ禍による感染防止のため、会場では学生と教職員のみで開催し、地域経営演習Ⅰ・Ⅱ(1年生)の口頭発表はオンライン(YouTube Live)で配信しました。

1年生はグループごとに15分の口頭発表を行いました。『わっしょい大原～祭りで地域を盛り上げる～』を発表したグループは、福知山市三和町大原地域の大原神社と旅籠あぶらやへの訪問を通して、例祭の担い手不足や広報手段の不足などの課題に対して、例祭では旅籠あぶらやで学生カフェを開店して若者の流入を図ったり、仮想空間を活用して例祭行事の国内外への発信を試みるなど、学生ならではの課題解決策を提案しました。

『地域での新たなつながりを生み出す取り組み～大正地区つながる広報プロジェクト「あんたが大正！」～』を発表したグループは、コロナ禍における新たなつながりを創出するために、地域住民のインタビュー記事をInstagram「あんたが大正！」に投稿し、住民同士の思いがけないつながりや人的地域資源を創出する広報プロジェクトを提案しました。

その他、農業や交通、廃校・空き店舗の跡地利用、防災、多世代交流、パーキングエリアの新商品開発など、北近畿地域を主なフィールドとした取り組みは多岐にわたりました。

当日はラーニングシステム(WebClass)を活用し、各発表に対する意見交換を行うことで学生同士の交流の場を設けました。2・3年生はポスターセッションにより活動成果を発表し、上級生の発表を熱心に聞く1年生の姿が印象的でした。



全体スケジュール

学年	時間	発表形式	教室
1年生	【前半】10:30～12:00 【後半】14:00～16:00	口頭発表	4階401講義室
2年生/3年生	13:00～14:00	ポスター形式	3階301～309 4階会議室

1年生「地域経営演習」の発表スケジュール

10:30～10:35	挨拶等	
10:35～11:00	「地域経営演習-Aクラス」 (担当教員:亀井 省吾・軍司 聖詞)	『三和農業タウン構築!!! ～Seasonから始まる地域×農業～』 『わっしょい大原 ～祭りで地域を盛り上げる～』 『三和地域の交通 ～みわひまわりライドについて～』
11:05～11:30	「地域経営演習-Bクラス」 (担当教員:神谷 達夫・中尾 誠二)	『福知山市・夜久野地域での学び』
11:35～12:00	「地域経営演習-Cクラス」 (担当教員:倉田 良樹、山田 篤)	『大江町の地域交通の便をよくするにはどうすれば良いか』 『自治区における活動の持続可能性に係る考察:大江町毛原地区の取り組みを例に』 『大江町の水害対策:蓼原地区を例に』 『大江町における小中一貫校の少人数教育の実情:大江学園の事例』
12:00～13:00	昼休憩	
13:00～14:00	ポスターセッション(3階セミナー室・4階会議室へ)	
14:15～14:40	「地域経営演習-Dクラス」 (担当教員:谷口 知弘、藤島 光雄)	『福知山で取り組まれている防災活動の調査と体験』 『桃映地域公民館との協働でつくる多世代交流の場～フリーマーケット&ふれあいコンサートでの実践～』 『地域での新たなつながりを生み出す取り組み～大正地区つながる広報プロジェクト「あんたが大正！」～』
14:45～15:10	「地域経営演習-Eクラス」 (担当教員:鄭 年皓、杉岡 秀紀)	『廃校活用から生まれる川合の可能性～川合がいつまでも川合であるために～』 『六人部パーキングエリア×新商品「ムトベリー」～コロナ禍でもお祭り気分～』 『福知山公立大学ほかご支店 空き店舗活用プロジェクト きんゆうカフェ』
15:15～15:40	「地域経営演習-Fクラス」 (担当教員:岡本 悦司・川島 典子・星 雅丈)	『医療福祉経営学科に必要な基礎知識の習得』
15:45～15:50	全体講評	

2、3年生ゼミ発表一覧

教室	ゼミ担当教員
4301	井上 直樹、亀井 省吾
4302	倉田 良樹、渋谷 節子
4303	鄭 年皓、谷口 知弘
4304	中尾 誠二、藤島 光雄
4305	山田 篤、三好 ゆう
4306	加藤 好雄、杉岡 秀紀
4307	大谷 杏、佐藤 恵
4308	佐藤 充、張 明軍
4309	岡本 悦司、川島 典子
4号館4階会議室	星 雅丈、澤口 聡子、神谷 達夫、芦田 信之、社会調査演習

学生プロジェクト

学生の、学生による、 学生のための就活手帳

活動の目的

活動の目的は、2019年度学生プロジェクト「学生の“学生による”学生のための就活手帳」を試行的段階と位置付け、そこからさらに内容の精査、加筆修正を行い、本学の学生にとって使いやすい手帳を制作することを目的とした。本学に在籍する“学生視点”で中身を考案し、地元企業にデザイン・印刷を協力してもらうことで、オリジナルな手帳の作成を目指した。



活動の成果

活動の成果は、「学生の“学生による”学生のための就活手帳」改訂版の完成である。工夫した点は、次の2点にある。1つは、ゼミの先輩たちが作成した旧版をベースに、改訂版には、本学キャリアサポートの担当職員の方とのコラボページを新たに設けた点である。本学学生のキャリアサポートへの「あるある質問」を記載し、本学学生にとって共通する疑問・悩みを明示した。2つめは、メモ欄ページを増加した点である。市販の就活手帳では様々な項目（ES応募候補先やToDoリストなど）の記入ページが設けられているが、学生各自でメモしておきたい内容は異なるはずであると考え、自由なメモ欄のページを増やすことにした。



北近畿インターンシップ 支援事業

活動の目的

本プロジェクトでは北近畿の企業と連携してインターンシップの企画や宣伝を我々が協力・支援し、学生がインターンシップを通して北近畿の企業と関わることで、業種や職種だけではなくその企業自体を深く知ること、学生の就職活動の選択肢に北近畿の企業が入ることを目的としており、北近畿内で学生が活発に活動できるきっかけとなることも考えている。



活動の成果

当初、本プロジェクトでは「株式会社シオノ鋳工」と連携をして、インターンシップの開催を予定していた。(株)シオノ鋳工様と何度もミーティングを重ねて、伝えたい自社の魅力をどう伝えるかをすり合わせて、我々がインターンシップの企画を行い提案した。しかし、新型コロナウイルスの拡大による、まん延防止等重点措置が京都に適用されたため、対面によるインターンシップの開催を延期することとなった。そこで、(株)シオノ鋳工様が自社で企画しているインターンシップの宣伝を我々が運営しているSNSを通じて行い、本学から数名が参加した。本来とは違った形ではあったが、企業の魅力を学生に伝えるという点では目的を達成出来た。



国内版 ヘルスツーリズム

活動の目的

本プロジェクトの主な目的は、ヘルスツーリズムに着目した福知山市のがん検診受診率の向上策の提案と、がん検診受診率の向上のために必要な啓発活動を検討することである。ヘルスツーリズムとは、「旅をきっかけに健康増進・維持・回復・疾病予防に寄与する」ことである。可能であれば、いくつかのツーリズムプランを提案する。



活動の成果

アンケート調査によって、がん検診を受診しない1番の理由は「がん検診が痛かったりつらかったりしないか心配」だからであるとわかった。がん検診に対する不安を払拭するために、病院や自治体が検診内容の詳細情報を、より発信することでがん検診受診者が増加する可能性があると考えられる。また、受診する理由が特にないため、がん検診を受診しない人も多かった。がん検診を受診していない人の内、観光と組み合わせたがん検診に参加したい人の割合は約26%であった。がん検診未受診者の4人に1人がヘルスツーリズムに興味を示したことから、ヘルスツーリズムの有効性が示唆された。



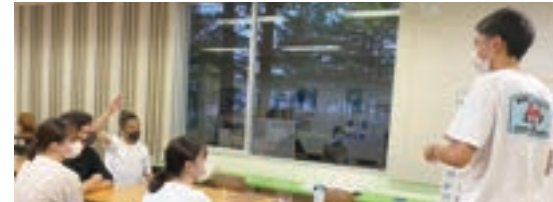
子どもの居場所調査

活動の目的

近年、貧困問題、虐待、いじめなど様々な問題を抱え、自宅・学校以外の「第三の居場所[※]」が必要な子どもが増えている。この現状を解決するために、街中の駄菓子屋などを利用して、子どもと年齢の近い大学生が、子どもたちの居場所を作ることはできないかと考えた。

そこで、子どもたちがどのような場所に集まるのかを知る必要があると考え、子どもたちの「第三の居場所」の現状を調査するために、本プロジェクトを立ち上げた。

※日本財団(2016)「子どもの貧困対策プロジェクト報告資料」より



子どもの居場所づくり

活動の目的

このプロジェクトの目的は「食事、学び、遊び」を通して大学生と子どもが「食事、遊び、学び」を通して交流を深めていくことです。「温かく楽しい空間」をコンセプトに置き活動をし、子どもたちに学校でも家でもない安らぎの空間、サードプレイスを提供しています。毎月第三火曜日に、大学の食堂にて30名ほど子どもを集め楽しく活動しています。



活動の目的

大学生活の中で、地域経営演習や講義を通じて出会う地域の方は、単発的かつ短期的なつながりになることが多く、関係性に物足りなさを感じており、地域の人とつながる手段が少なく地域と関わっていくことが困難であった。そこで、学生と地域の人と関わることができるイベントを展開し、緩やかな繋がりを作り関係性を築き、長期的な繋がりの中で多様な人と出会い価値観を広げるきっかけを作るため本プロジェクトを立ち上げた。



活動の成果

子ども食堂の代表者の方と相談をして、アンケートより先に何かイベントを打つべきなのではないかということになりイベントを企画しました。イベントは新型コロナウイルスにより中止が決まりました。

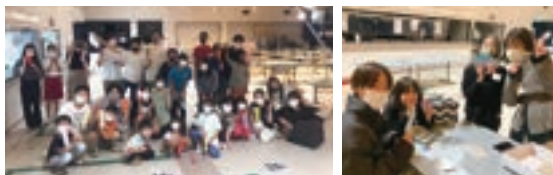
また、日新のちゃぶ台という子ども食堂に参加されている保護者や子ども、代表者の方に聞き取り調査を行いました。保護者に対する質問では子ども食堂があつて良かったこと、助かったことなどを聞きました。結果、子ども食堂があることにより保護者の余裕ができ子どもとのコミュニケーションが楽になったという意見が多数ありました。子どもたちには、子ども食堂で楽しんでいることを聞きました。結果、多世代交流ができることに喜びを感じている子どもたちが多くいました。

この調査から、多世代交流ができ、宿題などすることができる居場所が求められているのではないかと感じました。



活動の成果

2021年度はプロジェクト4年目を迎え、子ども食堂の規模が大きく拡大した1年となりました。子どもの参加者は1年で16名増え合計34名となりました。また、一度参加していただいた方全員が子ども食堂を継続的に利用していただいており、食堂がさらに盛り上がりを見せています。新型コロナウイルスの影響で活動が制限される時もありましたが、各種イベントの開催や地域の方と連携し、グルテンフリースイーツの提供など様々な活動を行うことができました。来年度は感染症対策を徹底しながら、様々な企画運営や、団体SNSにも力を入れていき、さらなる楽しい空間を実現できるよう全力で頑張っていきたいと思っています。



活動の成果

今回、都留文科大学教養学部地域社会学科から竹内彩笑さんをゲストとして呼びし、講演会を行った。コロナ禍ということもあって、会場や人数も制限したイベントとなったが、地域の人と学生が福知山について考え、交流できる一つのきっかけになったと思う。また、ゲストとして呼び出した竹内さんはいくつかの地域活動を行っている人で、その人に講演してもらったことで、参加者それぞれが今後の地域活動について考えることができ、意見を出し合えることができとても充実したイベントを行うことができた。

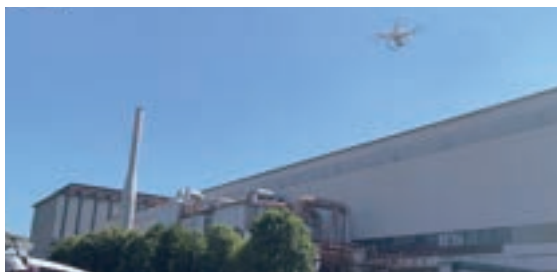


獣害対策用ドローン 開発のための基礎実験

活動の目的

福知山市周辺は、シカやイノシシなどの獣害を受けており、農家だけでなく公園管理者、工場などでも対応が必要となっている。この解決のために、ドローン技術に応用し、ドローンによって害となる獣を忌避させることを検討している。

本活動では、このためのドローンの製作を最終的な目的としており、ドローンに必要な技術的な要件を実験によって確認することを本年度の活動目的としている。



活動の成果

本学生プロジェクトの活動では、株式会社Fujitakaの方のドローンによるSECカーボンの屋根の点検の実験に立ち合わせていただき、ドローンでの実験のやり方や危険な点などを学ぶことができた。

また、福知山市や防災センターの方の立ち合いの元、お城と大学間でドローンで撮影した映像をトランシーバーで受信するという実験では映像の伝送に成功し、特定小電力のトランシーバーで届きにくいところでもモノクロの状態の映像なら受信することができた。今後はカラーの映像で取れるようにすることを目標に受信側に工夫を施したり、距離を伸ばすことを目標にしていきたいと考える。



スマートフォンの利用時間と 日常生活の変化について (中年期以降者に着目して)

活動の目的

スマートフォンは近年急激に普及し、日常生活に大きな影響を与えたと考える。例えば、スマートフォンの利用によって、運動習慣、他人との交流のあり方、睡眠の質、目の疲労度合いは変わったのではないかと。実際に変化があったのかを調べるため、福知山市役所大学政策課の方にご協力を依頼し、アンケート調査を行った。学生を中心とした若年層を対象とした先行調査が多いなか、本プロジェクトは40代から64歳にあたる中年期を対象に調査した。



活動の成果

アンケートは、影響を与えたと考えられる項目を中心に7つのテーマに分け、質問は全部で30問作成した。テーマは①回答者自身について②スマートフォン・タブレット型端末の利用状況③パソコンの利用状況④運動習慣⑤他人との交流のあり方⑥睡眠の質⑦目の疲労度合いである。福知山市内に住む調査対象者計500名にアンケート用紙を郵送し、181通(発送数の36.20%)の回答を得た。スマートフォン・タブレット型端末とパソコンの利用状況を比較すると、利用時間やおもな利用目的に違いがみられた。スマートフォンの利用が日常生活に与える影響については、分析を進めている。プロジェクトをとおして、アンケート調査の進め方、データのまとめ方などを学んだ。



大学生による フリーペーパープロジェクト

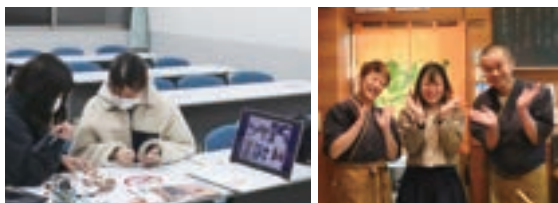
活動の目的

福知山の地域住民の方々にとって福知山は「暮らす町」であり、福知山にある魅力は「あたりまえ」に見えているのではないかと考察しました。私達は大学生かつよそ者視点で見た福知山の魅力についてフリーペーパーを通して発信することで、地域住民の方々に新たに福知山の魅力を発見してもらう機会を提供し、少しでも心躍る暮らしにしてもらうことを目的としています。



活動の成果

メンバー全員が初めてのフリーペーパー制作で手探りの状態で活動をし続けてきました。取材にご協力いただいた方、制作のご指導をいただいた方のおかげもあり、無事にフリーペーパー「nicoful(ニコフル)」初号を発行することが出来ました。0からのスタートでしたが、プロジェクトを経験したことで冊子制作の知識を得たり、企画や取材、編集技術を学んだり等多くの経験を積むことが出来たと同時に、地域との関わりの中で発信者としての心得も学びました。今後は初号について読者の声を拾い、プロジェクト活動のフィードバックとしていきたいと思っています。



Virtual Reality Alternating Current

活動の目的

自作したバーチャル空間上に様々な地域からゲストをお呼びし、地域紹介を含めた音楽イベントを行い、音楽、地域を広め交流することが目的である。出演者にはおすすめスポットやお勧めのお店を紹介していただき、それぞれの地域貢献、地域活性化を図る。



活動の成果

自作したバーチャル空間は完成し、2021/12/09に第一回を開催。北海道、大阪、長崎からゲストをお呼びし、無事バーチャル空間でイベントを行うことに成功。同時接続視聴者数は50〜75人、実際にバーチャル空間に足を運んでくださった方は延べ30人ほどであった。改善点を踏まえ第2回は2022/02/18に開催。第3回は4月に開催予定と、続行することも決定した。



福知山の子育てに関する 地域特性を探るプロジェクト

活動の目的

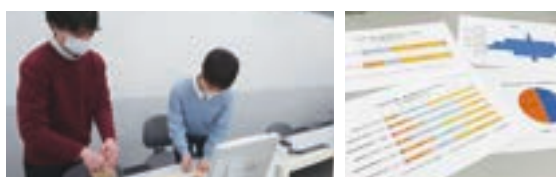
「合計特殊出生率」は、1人の女性が生涯に産む子どもの平均的な数である。福知山市の合計特殊出生率は全国で9番目に高いが、その理由は明らかになっていない。

本プロジェクトは、福知山市の合計特殊出生率の高さに影響を与えている因子を探り、福知山市が「子育てしやすいまち」とされる要因を明らかにすることを目的とする。



活動の成果

福知山市役所と協働し、アンケート調査を行った。市民のうち、2021年時点で25〜39歳である男女800人を対象とした。Googleフォームで質問紙を作成し、回答を回収した。結果、福知山市は「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方(=性別役割分業意識)に反対する人の割合が他自治体よりも高いことが伺えた。さらに、性別役割分業意識に反対する人の割合は、市外からの転入者のグループと、福知山市出身者のグループとで異なることも明らかになった。市出身者の性別役割分業意識が低く、男女共同参画意識が高いことを地域特性ととらえる。この地域特性が、市の合計特殊出生率の高さに影響を及ぼしている仮説を立て、今後分析を継続する。



福知山プロジェクト マッピング2021

活動の目的

夜の観光を促進するための福知山の夜のメインイベントとなるように「福知山イル未来」とは2018年から実施されています。

イル未来と2021への参加を通じ、大学と外部団体との連携を創出及び強化することや、地域活動に活かせる力(地域協働経験、創造力、プログラミング等のスキル)を養い、今後の事業へ繋げることを目的とし、活動を行いました。



活動の成果

本プロジェクトでは、福知山イル未来と2021に参加し、イルミネーションの展示の他に、持って楽しむ「ソーシャルディスタンス手持ち行灯」を開発し、多くの来場者の方々に実際に触れて頂きました。

今年から始めたソーシャルディスタンス手持ち行灯は、ただ光るだけでなく、ソーシャルディスタンスを保つための感染対策の役割と、離れた会場ともうひとつの会場を繋ぐ役割としても活用され、とても好評を頂きました。

これらの開発、展示により、目的にある地域活動に活かせる力(地域協働経験、創造力、プログラミング等のスキル)を、養う事が出来たと思います。





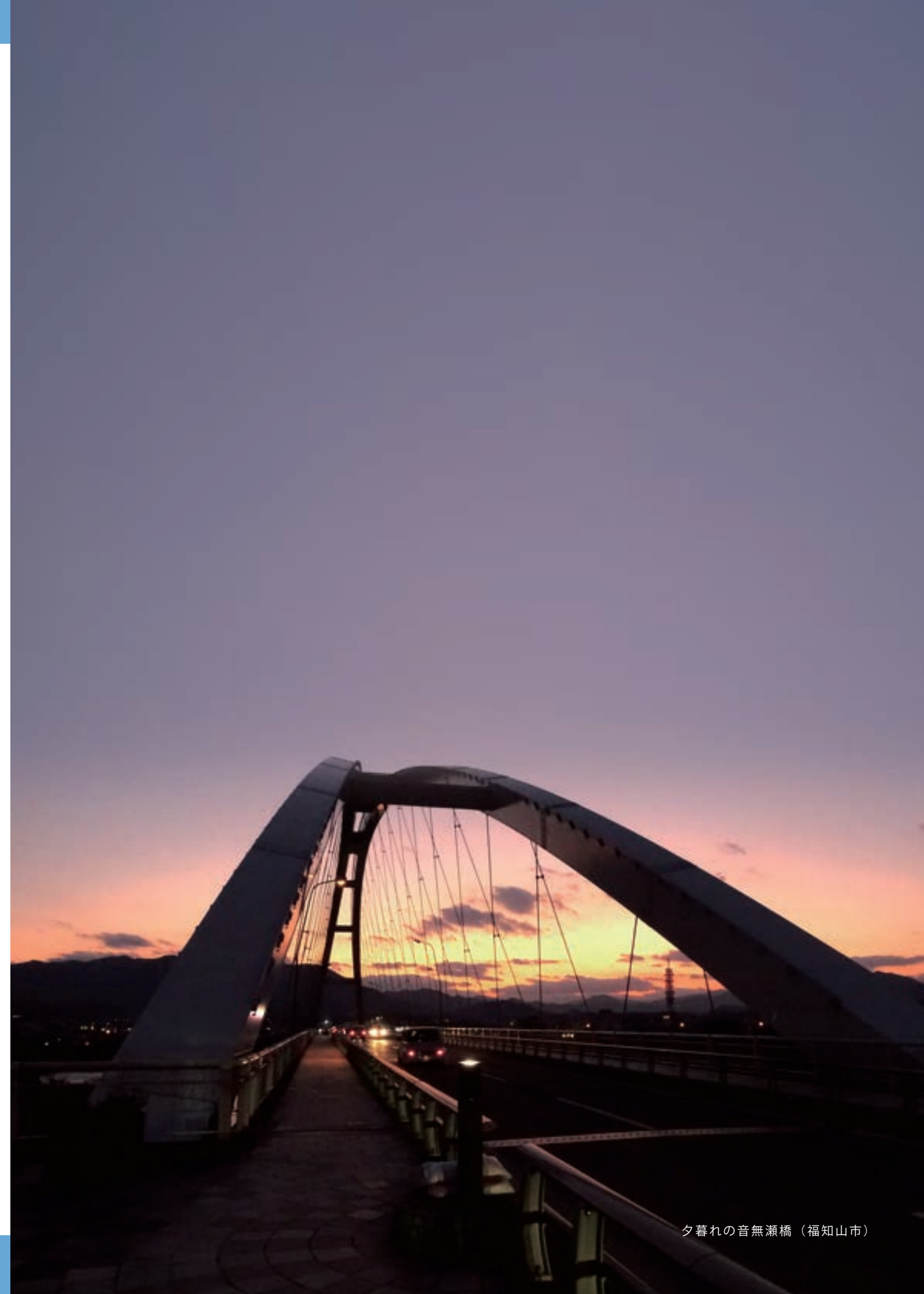
活動の目的

宮津市では、進学や就職による都市部への若者の流出、少子高齢化の進行、地域コミュニティの希薄化などが原因で、2010年には人口2万人を切り、2045年には1万人を切る予想となっている。また、2045年には、わかもの世代が人口の4分の1まで減少する予想となっている。「宮津わかもの会議」は、「若者目線から宮津市の未来について語り合い、未来を実現するための行動を宣言し、行動へとつなげること」を目的とする。



活動の成果

今年度は、京都府の商店街創生センターと共催で「商店街ネットワークサロン@丹後×宮津わかもの会議」を開催した。イベントでは、株式会社磯野開化堂代表取締役の磯野修一さんと、写真館PHOTO SNOW・一般社団法人MITEMI代表理事の中井由紀さんにご講演していただき、宮津の未来のために活動している私達にとっても刺激になった。また、「商店街と若者の距離を縮めるためにできること」というテーマでグループワークを行い、参加者の方々から面白いアイデアやご意見をたくさんいただき、私達のこれからの活動の糧になった。このイベントにより、共催していただいた商店街創生センターとのつながりも含め、たくさんの新しいつながりが生まれた。



夕暮れの音無瀬橋（福知山市）

新しい京都の公立大学



福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部 地域経営学科／医療福祉経営学科
情報学部 情報学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>

